北辰會雜誌

第貳號

明治二十八年四月十日發行

（非賣品）

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第貳號目次

論說

個人的自由　堀內秀太郎
社會の進歩と詩歌の變遷(完)　桐生政次
韓退之　森山守次
論進化論之勢力　高瀨武次郎

史傳

國學復興者としての契沖阿闍梨(續)　埋木の翁

文苑

某氏に贈りて兒を擧くるを祝す　虎岳老
友を諫むる文になぞらへて　孤鴻子

雜錄

諏訪紀行　年成書屋主人
冥邦會誌蘇生記　豐泉逸士
丁汝昌　在韓望南樓主人
鄕村の老爺を弔ふ　蝶魂子
釜山月　樂道子
和歌、俳句

雜報

李婉兒(承前)　泡志ま
書法傳承につきて　春日圓城
小澤蘆庵のちりぢり　大林德太郎
十數件

北辰會雜誌第貳號

論說

個人的自由

(エドワード、アトキンソン原著)

堀內秀太郎

經濟學又は社會學を研究する人々の範圍內に屬する問題を解するには、裁判所の判決を參考するを利便なりとす、特に英語國人民に於て然りとす、今日社會の爭論となる最大の問題は、實に個人的自由の維持に在り、個人的自由の存する說は普通法中にあり、而して個人の權利若し條例に由て損害せらるゝとあらば、訴訟人は法庭に訟へ、他人の同等なる權利を侵害せざる限は、權利上必然に自己の生活に必要なる諸要素を支配するとを定むるを得、此諸要素の中には自己の時間を支配するの權も亦存す、

人類相互の間に於て起りたる最重大なる變化は、身分より契約への變移是なり、往時に於ては其法に依れば、人の社會に於て占むる地位は其生誕、父及親族との關係、又は其門地、或は其階級に由て定れり、其人格全く其生れたる地位に屬せり、歷史ありしより契約なるものは成立せり、然れども其履行は德義上の約束よりも、寧ろ其形式に關係せり、サ、ヘンリー、メーン曰く、契約なる概念は其始めて顯はれし時には原始的のものなりき、吾人は信ずべき古書を見て、未だ曾

て人が約束を有効とする心意の習慣の尚完全に發達せず、又著大なる詐偽の行爲にして屢毫も慚るとなくして記載され、甚しきは大喝采を以て迎へらるゝとを思はずんばあらず、ホーマーの文學に於てユリスシス詐欺狡獪は、テストルの謹愼、ヘクトルの恒心、アヰレスの義俠と共に併び稱せらるゝを見るなりと、

氏は又自由契約による正當なる關係に基ける社會の進歩を論じて曰く、多數人は皆直覺的に眞實は吾人の時に於て往時よりも大に廣まれりと言ふを否めり、（中略）時の遷移に從ひ、前代未聞の欺詐を目擊するよりして、大に其先入の思想を確むと、

氏は尙論じて曰く、然れども其詐偽の眞質は明に詐偽の生ぜし以前に、德義上の義務の大に發達せしことを示すなり、是れ即ち少數者をして詐欺を容易ならしむる多數人の有する信用なり、故に若し著しき不信實の例生せば、合意には概して眞實行はれ、特別の場合に於て犯罪人に不眞實をなさしむべき機會を與へたるなりと結論するとを得と、

職業社會半世紀の觀察により、氏は以上の所論の深く眞實なるを感じ、終に若し負債の集取に關する諸般の法律及び適法提供に關する諸般の條例にして廢さるゝも、契約は悉く實行され、商業は進行し、負債は償却され、恰も我國各部に存する確固整齊なる社會の間に於ける如くならんと結論するに至れり、

若し國家の貨幣の性質にして一樣に支持されなば、債權者をして強て之を受諾せしむべき、適法提供に關する條例を要せざるなり、若し他に爭論の點あらば、債務者が貨幣を以て其契約を實行するとの言出しをなしたる證據は、其約せし貨幣よりも不良なるものを拂ふの撰擇を與ふるとなくして、之を保存するを得べし、貨幣の品質下落せし時に限り、債務者適法提供の條例を引用し、其契約の條欵を害せし詐欺を其双肩より政府に移すなり、

自由なる英語國に於ては、信用を設定するに付き、資格は資本より寧ろ有効なりとす、信用は負債の集取に關する法律よりも、寧ろ職業的正直の標準による、斯かる有樣に於ては、賣者、買者、傭主、傭人の正當なる契約をなすの自由は、夥多なる生産と、均一なる分配を生ず、而して社會の成立は實に個人的自由の維持に依るなり、

人の生存する要件は實に其勞働するに在り、而して勞働は或は心理的、或は手工的、或は器械的なるなり、或人は一時勞働せざるも可なるとあらん、然れども究竟勞働なくんば、社會は存立すると能はざるべし、

最も富みたる國の有する諸般の資本、鐵道や、水車や、製造場や、工作店や住家、さては道路の開鑿、土地の灑掃よりして生産的のものとなされし物を合算するも、三年又は四年間の生産額を超ゆると能はざるべく、大抵の國は皆之より少かるべし、若し萬物悉く食物、薪炭、衣服に變じ、人々皆勞作するを止めば、二三年にして悉く消費せらるゝならん、食物に關しては世界は常に一年間飢餓の有樣に於てあるなり、而かも常に至る所充分なり、四季の生産物の吾人の必要に應じて分配さるゝは、全く個人的自由、交換の自由及び適法に其能力を用ゐ、其欲する所に生活し、勞働し、いかなる適法の職業にても、隨意に之を執りて生活の資に供し、且ついかなる適法の商

業又は雜事をも行ひ能ふの權利によるものなり、（ニユー、ヨーク判事ピクハム、ピープル對ギルワニ）

貧人の世襲財產は其手腕の精力と熟錬とによる、然るに其隣人を妨くるとなく適當なりと思惟する方法を以て勞働するを妨害するは、明かに此神聖なる財產權を破るものなり、（ウエスト、ヴアルジニヤ判事スニダー、國家對グードウヰル）

發明の進步により、又實質的生產術に學術を應用するにより、團躰の有樣に望まるゝ所は、有害なる業務の除去せられ、最も困難なる者の位地の改良せらるゝに在り、然れ共勞働は繼續せざるべからず、而して人は其額の汗を以て食物を求めざるべからず、年を經るに從ひて得る眞の利得は、勞働時間の一部が必要なる難業の間に閑暇を得て樂む爲めに節するとを得るにあり、其閑暇の善く使用せらるゝと否とは、是を個人の自由に屬す、吾人の認めて最適當とする閑暇の定義は、閑暇とは時を出精に且つ聰慧に用ゆるに在りと言ふもの是れなり、蓋し生活に必要なる勞働より節せられたる時間は、空消したるより更に不良なるか、然らざれば尤も巧みに用ゐられたるものなり、

此問題を論ずるに當り、余輩は直ちに奇なる逆說に遭遇するなり、若し人皆富み、又は悉く貧しければ、各人は他人を傭ふと能はざるべく、相互に勞作して勤勞を省くの機なく、各勞働せざるを得ざるべし、斯かる有樣にしあれば、生活したりとて何の樂みもあらざるべし、各種の勞働は凡ての男女を要し亦餘ます所なかるべし、傭主及傭人に時の節せられ得るは、職業を交換するによるなり、由て以て富まんとする資本の力を導く人は、勞銀や利得の生する所の生產を大に增加し、自己及ひ其從者の費用を其生產物より引き去るも、綽々として餘裕あらん、富者と貧者との自由契約により、正當なる關係確立しなば、各、他のためになす業は均一に有用なる業となるべし、社會は人の互に相賴り、又天才の異なるによりて成立するものなり、大資本を結合し、指導し、使用するの大才は甚た稀なり、而して此才なくんば資本は動かず、然らずんば濫費され、人口稠密となるに隨ひ、勤勞は全生產の度を減すべし、故に財產の不平均は、富を構成するものゝ生產的職業に甚だ必要なり、人の其住する社會に於ける價値は、決して其勤勞又は工作によりて測らるゝものにあらず、又其働く時數によりて知らるゝものに非るなり、其價値は爲す所の業によりて定められ、其賦與せられたる精神的能力の性質、及び彼が指導を與ふる有形、無形の勢力の結果によるものとす、人の心意は困難にして長時を要する力作に、夥多及ひ閑暇を生せしむる第一の要素なり、

斯の如くなれは、己の額の汗により衣食する者の勞働時間を短縮し、休養と快復の時間を與ふるには、人皆全情を表せざるはなかるべし、其時として例外あるは、此目的を遂げんとの誤法によりて然らしむるに過きず、

若し此事業にして個人的自由を得んとする人を妨ぐるに傾き、彼等の自由契約の權を損害しなば、時を節する眞の方法と誤法との區別をなすの時は來れるなり、換言すれば勞働時間を減するの眞法と誤法とを區別するの時は至れるなり、

通常萬般の有躰物の生産に必要なる原素三あり、土地、勞働、資本是れなり、其他生産に欠くべからざる二要素ありて、各土地、勞力、資本と均しく必要なるものなり、能力即ち勞働及資本の進行を指導するに要する心理的勢力、及び生産の諸般の進行に要する時間是れなり、

是等土地、勞働、資本、能力、時間の中、衆の等しく有せざるべからざるものあり、其他の要素は變すべきも、此一要素は常に等しく、且つ不易なり、時間即ち是なり、

一日の時數は二十四時とす、人の貧富に拘はらず、又才能の有無に關せず、財産の一機會、一原素にして萬人の等しく有すべきものは時間なり、時間は實に共同要素なり、而して又一方より見れば、隔離せる原素にして、他人の權利を侵害せざる限りは、其意に從ひて之を消費することを得るなり、

是が爲に時間を自由に消費する事に就ての法律上の制限は、其個人的自由を害すること、凡て他の人間の自由に干渉するものよりも甚し、斯かる制限は性質上平等ならざるべからざるものに、不平等を生せしむるものなり、

然れども各州の議會は、漸々會期毎に、時間の使用を制限する條例を制定しつゝあり、此等の條例にして實行されなば、專賣を起し、私の階級を生じ、無權を負はしむるに至るべし、警察官の命令又は社會の安寧を保維するとの托言を以て、此等の條例は多くの市民をして自由契約の權を失はしめ、其意に從ひて時を費やすことを得ざらしめ、其人自身に取りては或は過度に勞働するの虞あるも、毫も他人に損害をなさゞる、適法にして且つ無害なる業をすら奪ふなり（未完）

社會の進歩と詩歌の變遷（續）

桐生政次

個人の世界が國民の社會に勝さりたるが如く、人詩もまた國詩に勝さるなり、パアロフは嘗て學術と美術の關係を論して曰へらく、美術は意思を變して物躰となし、虛靈を變して實在となし、形而上を變して形而下となすと、國詩に於ては類念を發揮するが故に、自ら意思なり、虛靈なり、形而上なり、人詩に於ては個念を發揮するが故に、自ら物躰なり、實在なり、形而下なり、ハルトマンは結象美を以て抽象美の上にありとし、宇宙の傾向が常に結象の上に表はるゝの理を示したり、國詩に於ては類念を描寫するを以て、自ら結象美たるを免れず、之れ吾人が人詩を以て國詩に勝れりといふ所以なり、

箇人の世界のかくの如く美なり、自由なり、此世界は宇宙の縮小舞臺なり、稍造化の目的に近づきたり、然りと雖も這般の自由は規則なし、規則なき自由は放逸に陷り易し、放逸なるが故に他の胸中を斟酌するの力なし、唯夫れ斟酌するの力なきを以て、或者は此端に向つて走らんと欲し、或るものは彼岸に向つて掉さゝんと欲す、世間は箇々の人間に分れて、雜然燥然以て宇宙の大調和を顯すること能はず、甚しきは他を殺戮して以て自由となすものもあらん、之れ豈造化最終の目的ならんや、故に若し箇人の世界の終期に達し、箇人主義の流行其絶頂に達することあらば、俄然一大破烈して世間は愴凄なる大修羅場と化すべし、吾人は幾年を經てかゝる大修羅場の破烈せんかは今こゝに斷言することを能はずと雖も、箇人の世間は此修羅場を以て終了せんことは、尤

も安全に預言することを得ん、其の修羅場はかの佛の革命の如く小なるものにあらずして、世間的革命の大修羅場なり、

嗚呼こゝに於てか、吾人が胸中に編せる社會史の最終の時期は來らん、最眞、最善、最美の理想世界は來らん、和氣洋々たる道理一統の世界は來らん、シルレルは理想的なる社會を論じて曰く、たとへ德力物質的社會に於て其道德的調和をなすと雖も、自然の複雜は之れが爲めに破碎せらるゝことなし、もし又自然社會の道德的結構に於て其複雜を維持せんと勉むるも、其道德的調和は決して之れが爲めに破碎せられさるべし、單一及び亂雜は共に遙か遠かりて、洋々たる調和は此社會は治めん、人間は互に其材能を交換し、又現實の國家と自由の國家とを一致せしめ、諸種の性格は其中に綜合せられて其の箇々を見ること能はざるべしと、嗚呼諸君よ恐るゝ勿れ、社會はかくの如く箇々の人間に別るゝと雖も、必しも之れを調和すること能はざるにあらず、吾人は今こゝに其何が故に然るべきかは說明すること能はざると雖も、吾人が感情は尙造化宇宙が本來の面目を想像して、終に結着を此理想的社會につくるなり、然らば何が故に吾人が想像はかくの如く思はしむるか、曰く吾人はもと極端の空想界に馳走するを好まず、又極端の現實界に齷齪するを好まず、願くは想と實との調和を得て、卑俗に偏せず空理に偏せず、三千世界の衆生をあげて悉く靉然たる此の調和社會に呼吸せしめんと欲すればなり、かの國家は餘りに卑俗過きたり、現實過きたり、個人は餘りに空理に過きたり、空想に過ぎたり、而して此道理一統の世界は空想と現實を調和する也、卑俗と空想を融合する也、

理想的社會既にかくの如し、此の如き社會に產する處の詩歌が亦圓滿無欠の上乘的詩歌なることは疑を容るゝこと能はざるべし、這般の詩歌はかの國詩、人詩の如く、狹隘なる國家、空想なる箇人を寫さず、宇宙、世間即美の極致を描くを以て、吾人は之れを稱して世詩といふ、所謂ドラマ、世相詩は即ち此世詩なり、

狹小醜穢なる國詩は措て問はず、人詩の美は即ち美なりと雖も、未だ以て美の極致となすに足らず、人詩の美は小なり、人間の美なり、未だ以て宇宙の美、世間の美となすに足らず、其故奈何、請ふしばらく論せしめよ、

箇人を寫せるものは、箇人之れを讀んで同情を表すべしと雖も、未だ以て一般の人間をして同情を表せしむるに足らず、人詩能く箇人をいるゝと雖も、未だ以て世間宇宙をいるゝに足らず、之れ人詩が未だ以て大なる美となすに足らざる所以なり、

夫れ概念や類念やもと所動的にして、外物の媒介に依らざれば以て靈妙なる概念、若くは類念を產すること能はず、また此の世界はいかゞに美なる箇外を以て滿たさるゝと雖も、概念若くは類念なくんば、何を以てか宇宙の至妙を悟らん、之れを要するに概念と箇物と相依らずんば以て造化の最終目的を達すること能はざるなり、然るに人詩は兩者の中唯一個を描くのみ、之れ人詩が、未だ以て美の極致となすに足らざる所以なり、

之れを要言せば、國詩に於ては主觀の情客觀の相に勝ち、人詩に於ては客觀の相主觀の情に勝ちぬ、之れ兩者共に宇宙の大調和を發揮すること能はざる所以なり、此間に立ちて情と相との平均

を得、箇物に偏せず、概念に偏せず、兩者互に調和活動して、以て宇宙を一幅の畫圖中に收むるものあり、之れ即ち詩歌中の最大靈妙なるドラマの花、吾人が所謂世詩之れなり、

ヴクトル、ユーゴ曾て其作ルイブラに自序して曰く實にや「フートライト」と呼はれつるかの赫燿たる關門は、劇曲家が藝術を創造せんとする處の理想世界より、全く現實世界を分離し、藝術と自然とを結合して以て性格、人間を活動せしむ、是等の性格と人間とに一を發達せさせ、また一を變形せさする處の感情を混合し、終には是等の性格と人間とを自然の大法則と衝突せさせ、以て人間の生活を描く、即ち大小の事件、感情的、諧謔的、震慄的の事件を寫して以てかの所謂趣味なるものを感情に愬へ、又道念的哲學の眞理とも稱すべきものを精神に愬ふ、凡そ此等のものはドラマが以て目的とする處なり、要するに感情を描きたるを「トラゼヂー」といひ、性格を寫したるを「コメヂー」といふ、而して此兩者を混したるドラマこそ、實に兩者を包含し、又其の効を奏せしむる處の第三の大藝術なれ、もしセエキスピヤの其間にありて、左手をコルヂールに與へ、右手をモリエルに與ふることなくんば、兩者全く相關せずして止まらんのみ、かくの如く「トラゼヂー」と「コメヂー」との二異電氣が相觸接して、而して發する處の電光は之れ即ち「ドラマ」なりと、ユーゴの言吾人が意を得たりといふべし、世人多くは「トラゼヂー」及び「コメヂー」を以て「ドラマ」の中に編入するものあれども、吾人は斷じて其意に服すること能はず、「トラゼヂー」や「コメヂー」や實にドラマの躰を具ふるなり、然りと雖も其精神は未だ以て「ドラマ」となすに足らざるなり、前者は普通性の感情を寫せるを以て類念たるを免れず、後者は殊特性の性格を描けるを以て箇念たるを免れず、唯「ドラマ」即ち「トラヂック、コメヂー」は能く兩者を融會して表顯するを以て、之れを圓滿なる詩歌とす、所謂世詩は花に譬へば櫻花の如く、學問に配すれば哲學の如く、恰々として美人に對し、肅々として聖哲に對するが如きは、世詩を措きてはた孰れの詩歌にか求めん、

論し了れば寒燈既にほのくらく、一陣の烈風霰と共に齋窓を叩き、頗る吾人が妄想を笑ふに似たり、

（完）

韓退之

森山守次

毛公董生の徒毫を含んで立ろに數千言を綴る、綺思曖霞の辭、抑これを呼んで希代の大文章とせんか、曰く否、經術未だ以て稱するに足らされはは也、鄒陽枚乘の流簡を伸へて直ちに文百篇をなす、鴻藻景鑠の句、抑これを仰て絶世の大文章とせんか、曰く否、聖人に紕繆する所多きを以て也、鬼神を感動せしめて以て、元化を舒暢し四方を緝安し、之を國家に施して而して、百度を整正し美德を發揮するか、然らすんは精義神奥を測かり清機妙理に入るものあるに非ずんば、直ちに呼んで大文章となすに足らざる也、何ぞ徒らに辭句の間に拘泥し、彫篆細巧僅かに文脈を通するか如き者に至ては、雲の如くに起り霞の如くに集ると雖も、豈に以て一顧に値すと云はんや、故に孟子七篇より唐末に至る迄天下遂に大文章なき所以也

苟も文章を說く者は先づ唐宋を竝稱す、然れとも宋文は唐文の子たるに過きさる也、唐文と雖も

初唐中唐の如きは紛々擾々稱するに足るものなく、僅かに晩唐に至て所謂唐文の基礎を定めし也、其間或は江右の餘風に浴ひ、浮華輕躁の巷に彷徨し、或は玄宗經術を好みて、以て探玄の淵に浮沈す、而して彼の四六偶對の勢力は恰んと世を擧けて其渦中に陷らしめ、誰ありてまた三代秦漢の古文を顧るものなきに至れり、弘文館に書二十餘萬卷を藏し、學生三千世に濟々たりと呼ふも、其文辭毫も一瞥に足るものなく、其人物亦稱するに足るものなし、晩唐に當りて鄧州南陽の地に一偉人物を生せり、彼は此錯雜せる時文を排斥して古文を唱へ、こゝに始めて唐文の基礎を興し、で百千世に涉りて文章の聖と呼はれ神と仰かれたり、彼とは誰れ韓退之其人也

退之孔子を去ること、に一千五百年、孟子と相距ること一千餘年、大道既に衰へて老佛しきりに行はれ、學と不學と擇ぶなくして此門に出入し、揚墨亦一方に割據して氣焰漸く振ふ、時の天子已に佛骨を歡迎し、大臣宰相傍らに贊唱するの時に當り、獨り卓然として儒教を守り、老を排し佛を排しまた揚墨を排し、帝を諫め大臣に違ひて幾度か貶遷せられ、殆んと失意を以て一世を終りしとは雖も、彼は死して而して後は儒教復興者として、直ちに孟子に繼ぎ、文章の神聖として、列を孟子と同うして稱せらる、

彼が全集を窺ふに大約五十卷、傳や說や、記序や碑銘や、封冊論文幾百篇、首めに彼が詩集を附せり、嗚呼幾百篇中何れをか最となすべき、孟子七篇に次て千古の名文と稱せらるゝもの、果して何の篇とかなす、云ふ原道の一篇實にこれ也、當時柳李あり後世歐蘇あり、各一方の秀を擅にして相角逐するものあるも、唯原道に至ては畢竟窺ふべきに非すとせり、先進の評に曰く

儲同人云天具二曜五星三垣四宿及衆星之繁然者太史公天官一篇綜而擧之地具高山大川州域土壤與其生植之物禹貢一書綜而擧之人具帝王師相周公孔子所相生養經訓之理原道一書綜而擧之詞少義該蓋三才之嚒括

我道別於異敎在有爲無爲以有爲爲敎合仁義而言道者也以無爲爲敎去仁義而言道者也先言老次及佛後或兼言老佛之害或分言老佛之害見俱屬怪誕不經爲生民蠹而堯舜禹湯文武周孔相傳之道敎以相生相養而除民之害者誠有易明易行而斯須不能離者也本布帛菽粟之理發日星河嶽之文振筆直書忽擒忽縱董之醇粹運以賈之燋奇爲孟子七篇後第一篇大文字

原道の雄偉深玄それ如斯、而して之に次て稱せらるゝものは原性原人原毀等也

韓の筆は抑も誰家より入りしものか、これ其文の見るに當りて甚だ注意せざる可からざることも也、李性學は云ふ「韓退之學孟子」と然り彼の神髓は孟子より悟入せしと其文に徵して明かも也、又王敬之は云ふ「韓柳之文何有不從左史來者彼學爲韓爲柳」と然り彼れの筆は左史に養はれし所蓋し少々に非る可し、而してその史記を愛珍せしとは既に世人の知るところ也、案を拍て孟子を快文字となす所以果して何そ、豈夫夾の夾たるが故に非すや、而して韓文は又よくこの夾を得たり、妙を呼んで史記を賞揚する故抑も如何そや、唯夫巧に疎を用ゆるが故に非すや、而して韓文は又よくこの疎を得たり、思ふに文あつて以來夾疎並びに兼得せし者韓文を除ては將た何處にか尋ねんや、而して文格嶄然として法度あり事を記するに秩序ある所以の者、蓋し左史より悟入せしところ也、我れは彼が讀書果して幾萬卷なるやを知らずと雖、所謂韓文の骨骼を作らしめしは、此三家の關

する者、決して其小部に非ざるを信ず、然れども其韓文となるに至ては、毫も摸倣の痕跡をとゞめざるのみならず、却て躍て肩を三家に比するに至れる也、而も衆美韓文に歸す、疑ふらくは天下また大文章なからん歟

彼が更に蟬脫するところは峻と古にあり、これを以て唐以下古文を學はんとするものは、必す韓文の門より進む、從て其文章を宗とし學ふ者年々歲々に加へ、彼が全集を註釋する者も五百家を出づ、中に洪興祖樊汝霖孫汝聽韓醇劉崧祝克蔡元定王伯方崧卿舉正朱子攷異魏仲舉あり、其盛焉んそ餘人の倣ふべきところならんや、彼を學ふ者百千萬衆に及ぶと雖、僅かに其句法を得るに至て止むのみ、獨り歐陽修あり、彼れの一斑を得て更に一機軸を出せり

彼れの文を評せし者は亦幾千萬人に及ふ、能く知て而て評する者と知らずして評する者と交相混せり、我れはこゝに評者の人となりを詳にしてこゝに其言を揭けんとす、柳子厚は率直鋭進の士、平生吐漏する所些の巧言を加へす令色を混せず、而も韓退之と交り相深きを以て、先づ首に彼か評言を記さんと欲す

與司馬遷王下過揚雄遠甚

と彼れか門下生たり且つは親友たりし李翺の言に曰はく

我友韓愈非茲世之文古之文也非茲世之人古之人也其辭與意適則孟軻既沒亦不見過於斯者

と又皇甫湜云へるあり

先生之作無圓無方主是歸工抉經之心執聖之權尙友作者跂邪觝異以扶孔子存皇之極茹古涵今無有端涯鯨鯉春麗鷲耀天下栗密窈眇章吐句適精能之至鬼入神至姬氏以來一人而已

或は泰山と評し北斗と評し、滔々奔盪せる長江と評し合ふ、其言辭は悉く異なれりと雖、畢竟するに歸する所は一而已、亦什百を擧げすして可也、唯本朝の賴山陽が昌黎韓愈の像に贊せしものを、且らく其終りに附せんと欲す

筆底江河走蛟龍。龍文之鼎力能扛。手紫孤壘連鄒嶧。身當二氏百萬敵。元濟庭湊等嬰兒。搤吭關口本優爲。慢膚大腹面渥圓。非是江南夜宴韓。渾噩姚似溢眉宇。「二十八宿照萬古」安矚畫工更傳神。爲佗被髮騎麒麟

而して蘇東坡の潮州韓文公廟碑は、普く人々の知るところなれは略さん

嗚呼偉也といふ可し、然れとも彼の文章のまかく天下に稱揚せられしは、彼れ在世の時に非すして却て二百年の後より也、即ち歐陽修が彼の文を喜んで、而して之を刊行せしより始まる、彼れが嘗て于襄陽に與ふの書中の、先進後進の說、世を距てゝ彼が身に爲されたる也、彼れが遺文は、よく歐陽修を導き、而して其聲譽を揚くるに至りしもの、掌を拍つて奇と云はさるべからず（未完）

進化論の勢力を論す

高瀨武次郎

緒論

生物界に起る自然の現象を實驗して生物界に起る自然現象の眞理を證明したるものは夫れ進化論なる哉、進化論は宇宙最大の理論にして萬世不易の原理なり、吾人をして吾人々類が萬物の靈たる

眞價を知らしむるものは夫れ此進化論の勢力なる哉、凡そ吾人々類に最も親密なる關係を有するもの此進化論の右に出つるものあらざるべし、抑此學や發生以來日猶ほ淺し、初め「ダールウヰン」氏が彼の有名なる原種論に於て之れを科學的に論證せしに起り今に至り僅々三十年に過ぎざるなり、然ども其進歩や實に迅速にして滔々一瀉千里の勢あり、其論する所洪大深遠なるを以て其影響の諸種學術、人事社會に及ぶもの非常に大なるものあり、或は論礎を此に取りて其進路を變するあり、或は根據を此に求めて其組織を改むるあり、或は其勢力に壓倒されて空しく逡巡するあり、或は之れに向て論難攻擊を試み却て己が非を顯はすものあり、此論の我邦に傳來せしは極めて輓近なりと雖も其理論の確實なると其勢力の强大なるとに由りて到處喝采を以て迎へられ既に已に社會一般に唱道する所と爲れり余頃日初めて進化論を聽き漸く其終を告ぐ、然ども余の動植物、地質等の學に明ならざる固より其詳細を解する能はずと雖も幸に岡村博士の講演の明快なると提撕の懇篤なるとに由りて聊か其一斑を窺ふを得たり、最初、動植物の歷史より章を追ひ節を重ねて之を陳述せられしが就中、人爲淘汰、自然淘汰、本能、雌雄淘汰、動物の餌食と爲るを防ぐ爲めに植物の有する諸機關、花の起因、生物の單位、生理上の分業及び生物の個躰、生死の別、生殖論、受精の現象、遺傳、形質變異の原因、個躰發生及び系統發生、自然に於ける人類の位置でふ如き各章愈出で愈新斬にして而も精確、其關係愈廣く愈大なり、頓に舊耳を一洗し新思想勃然として起る其趣味實に言ふべからざるものあり、然ども此と同時に聽講の際其影響に關して利害如何と推考せしことと更に幾回なるを知らざりき、故に今試に其勢力を論じ以て諸種學術、宗教、人事社會等と相關係する所を審にせんと欲す、然れども本題や固より至大至廣の議論にして謬劣不才余輩の如き者の得て盡すべき所にあらざれども聊か其概梗を論して讀者諸君の叱正を仰ぎ其詳細の如きは將に他日を待て大に論ずる所あらんとす、今本題を論ずるの便宜に從ひ之を分て四章となし章を追て徐々に陳述せんとす、

第一章　進化論と動植物學の關係

進化論の動植物學に於ける猶ほ基礎の家屋に於けるが如く、根莖の草木に於けるが如し、夫れ動植物學の起るや初めより秩序整然たる學問として來れるものにあらず、當初只漠然として骨董的に種々珍奇なる動植物を蒐集したるに過ぎざりき、凡そ今より二千有餘年前、希臘の哲學者「アリストートル」氏始めて斯學の權輿を爲し爾來學者多くは之を宗として解釋するに止り毫も進歩することなかりしが西曆紀元一千七百年頃に至りて「カール、フオン、リンテ」氏が初めて種類則ち species を說き、凡そ生物は其親に類似すと」云ふ、則ち親と子とは一種類なりと、二名式を創說して世界の動植物を分類せり、此に於て分類學大に行はる、其後卵巢精蟲の發見ありて雌雄二元素を知り發生學開け、漸く形躰學、組織學、解剖學、等起れり、其間に「エラスマス、ダールウヰン」氏出て說を爲して曰く「動物は地球と共に生したり」と又曰く「動物皆異なるものにして二定と同しきものなし」と是れ則ち動物變易說なり、其後英國の地質學者「ライエル」氏出て地質學に由りて彼の耶蘇敎的の、地球造り直し說、の妄を破り且つ曰く「太古の動物と今日の動物と全く無關係にあらず」と、同時に佛國に「ラマーク」出て說を爲して曰く「動植物は太古より其

系統は連綿として絶えず其間唯少々變化ありしのみ、其變化は外界の狀態と動植物自身の內に起る變化に基因す」と且つ、用、不用說を唱へ大に斯學の面目を一新し一段の進步を促せり、一千八百三十八年に至りて獨乙の「シユライデン」氏植物躰は小さき細胞より成立つことを發見し、翌年に至り「テヲデル、シユワン」氏動物躰も亦小さき細胞より成立つことを發見せり、茲に於て已に cell てふ物質的單位を得たり、其後諸說並起り遂に「ファルラレッド、ワルレス」及び「チャールス、ダールウヰン」輩出して共に進化論を唱へ動植物學大に備はる、此に由て之を觀れば動植物學の完全なる學問と爲りしは全く進化論の勢力に由る、換言すれば進化論起て始めて眞正の動植物學起る、則ち進化論は動植物學を論證するの學なり、豈に唯唇齒輔車の謂のみならんや、

第二章　進化論と人事社會の關係

進化論の人事社會に影響するもの一にして足らずと雖も、今其著しきものを擧げて之を論ぜん、本論中生物變異の妙理所謂應化の妙理則ち動植物の彩色、形躰、斑點、模樣、動物に對する植物の防禦、動植物共棲の有樣、植物の葉の形狀及び其配列方、花の起因、生物の散布等の理を說き來りて生存競爭の必要より起れり、自然淘汰の結果なりと論定するに至りては實に明々瞭々毫も餘蘊なし、恰も Nature 自らが物語るが如し、是れ余の最も敬服讚嘆する所なり、然り而して此等數章は或は直接に或は間接に人事社會と關係すること亦甚大なり矣、動植物共生の理特に動物中昆蟲類が花の受胎作用を助くる點の如きは最も直接の關係ありとす、凡そ花は一花中に雌雄兩蕊を備ふるも甲花は自家受胎せずして多くは乙花と受胎す、縱令自家受胎することあるも其結果充分ならず、則ち第一其菓實少數なり、第二其菓實小さくして微弱なり、其三其菓實より生じたる子が菓實を結ぶに當りて其數少く其形小さくして且つ微弱なり、此理を初めて發見したるは有名なる「コンラッド、スプレンゲル」氏なりき、則ち同氏は「一種の花は受胎することを好まざる樣なり」と氣付きたり「ダールウヰン」氏は更に此說を基本として一花に袋を被らしめ風媒は勿論蟲媒を許さずして實驗し遂に其說を確證せり、以來此理を應用して人事社會に於て親族結婚の害を說き、異族結婚を奬勵するに至れり、此勢力の及ぶ所衛生に、生理に、醫學に、農學に、倫理に、人口繁殖に則ち一國の富强の如何に、至るまで非常に强大なるものあるや余の喋々を待ずして明なり、

第三章　進化論と宗敎の關係

凡そ宗敎の地球上に行はるゝもの其數何ぞ限らん、然ども余今就中最も勢力あるもの一二を擧げて其關係する所の如何を討究せんとす、

第一節　進化論と佛敎

佛敎の宇宙萬有を說く周悉完全、他の宗敎の比にあらず、耶蘇敎は上帝則ち神を以て萬有の創造者と立つるも佛敎は則ち然らず、佛敎は因緣敎なり、因果應報を以て一切の現象を說く、善果を得たるは善因を爲したるに由り、惡果を感したるは、惡因を播きたるに由ると、是れ該敎の所謂自業自得說なり、且つ總ての境界を分つて十界と爲す、曰く地獄界、餓飢界等なり人間界を經て佛界に至る是なり、而して此十界も別に一種の創造者ありて之を作りたるにあらず則ち佛が之を

造りたるにあらず、固より如此結果を生すべき因緣ありて生したるなりと、已に十界あり、佛たらんと欲せば佛たるべく、人間たらんと欲せば人間たるべし、只自ら欲する所のまゝなり、唯其業を生ずべき種を播くべきのみ、然ども貴は凡そ心あるものゝ共に欲する所、貴きの至所は佛たるにあり、下九界に暫らく生るゝ者と雖も其終局の冀望は只佛界まで進化せんとするにあり、誰か退化して修羅界に生れ地獄界に落つるを好まん、抑佛とは何ぞや曰く佛とは大悟の謂なり、世界にあらゆる現象の眞理を悟り盡したるものは即ち是れ佛なり、佛豈に人と異ならんや、異なる所一に其眞理を悟覺する Degree の高下あるのみ、且つ夫れ佛敎最終の目的は草木國土悉皆成佛と云ふにあらずや、則ち最下等草木の如きだも猶ほ進化して成佛することを說くものなり、進化論の萬有(生物界の)を記く佛敎の說と全く同し、異なる所只分界法の如何にあるのみ、夫れ進化論の最下等動物より進化して最上等の人類に至る已に人間の位置に達し特に大聖となり萬有の眞理を悟り盡したるものは則ち所謂大覺世尊たる佛に達したるなり、且つ動物の系統を詳細に研究し來れば、往々退化するものを發見すと雖も、是れ豈に其欲する所ならんや、其望む所は層一層進化して萬有の眞理を覺らんとするにあるのみ、蓋し亦吾人々類の進化して愈倍、宇宙の眞理を覺るに至るも人は依然として人なり、豈に一種異樣の形狀を生せんや、唯悟覺の度の差異あるのみ、此に由て之を見れば佛敎は進化論に由りて勢力を增し、進化論亦佛敎に由て勢力を增す、時に前後あり地に東西の別ありと雖も、眞理を發見するに至りては猶符契を合するが如し、嗚呼善哉嗚呼善哉

第二節　進化論と耶蘇敎

耶蘇敎と進化論は互に不俱戴天の讎敵なり、夫れ萬物は神の創造に係るとは耶蘇敎の敎旨にあらずや、初め「ダールウヰン」氏原種論を著せる時には人間と他動物の關係を明言せず、只暗々裡に其香氣を馨はせ以て世間の模樣を察したり、是れ他なし歐洲の如き耶蘇敎信者の多き國に於て、突然該敎々旨の根底を打破するが如き議論を出せば、社會の道德上に莫大の影響を及さんことを恐れたるに由る、然れども已に一般の樣子を窺ひ得たれば其後七年にして斷然意を決して「人類の系統」てふ論を著し以て彼の「ハックスレー」氏の「自然に於ける人類の位置」てふ論と相互應援し人類の起源を明かにせり、嗚呼耶蘇敎の創造說や今日既に已に孤城落日の有樣に陷れり、防禦に策盡きて四面楚歌の聲を聞く、進化論の如きは全く之れに異なり、正々堂々向ふ所敵なく、其勢力の增加は人智の發達と並行し、駸々乎として其止まる所を知らず、嗚呼亦盛ならずや、

第四章　結論

進化論と人類品位の關係

「ハックスレー」氏曰く「人類の自然に於ける地位並に萬有と人類との關係に於て、吾人は何處より來りたるや、吾人は自然に對して何程の勢力を有するや、將來如何に進み行くものなるや、は吾人の最も知らんと欲する所なり」と、「ハックスレー」氏余を欺かさるなり、余本題を論するに當りて最も此點に重きを置く、蓋し進化論を一讀したるものは必や人躰の何れの點に於ても他の哺乳動物より變化し來れるとの證迹あるを知らん、其最も人類に近きものは猿猴類なり、則ち人類は猿

猴類と其祖先を同うするものなり、進化論人類の系統を論じ來りて曰く猿猴類と其祖先を同うすと、卒然として之を聞けば人をして腕を扼せしむるものあり、然れども考一考し來れば大に然らざるものあり、余の特に進化論を稱する誠に此に在て存す、其理何ぞや――進化論に曰く「吾人人類は實に他の動物と共に最下等なる單細胞蟲より來り或は魚類の祖先と共に水中に住し水を呼吸したるも遂に陸に上り兩生物の祖先となり、他のものは此に歩を止めたるも吾人の祖先は歩を轉じ進て爬蟲類の祖先と同樣なる形狀を現はし其或ものは一方に歩を曲けて爬蟲類は鳥類となりたるも吾人の祖先は猶進て哺乳動物と爲り、遂に又進て猿猴類に似たるものとなり、一方には廣鼻の猴類となり、一方には狹鼻の原猴類となり、或は變して黑猩々となり、或は變して大猩々となり、或は猩々となるも、吾人の祖先は更に進て人類となり、道理を辨へ言語に通じ、宇宙の眞理を研究することを得るに至りたるものなれば吾人々類の祖先たるものは實に「シルリアン」或は「カンデリアン」頃より長き年月を經、絶えず競爭して以て今日の有樣に至りたるものなり、且つ夫れ今日より益々進歩して愈々靈妙の叡智を逞ふすべきは獨り人類あるのみ」と、若し夫れ耶蘇教的の創造說を以て人類を論ずるときは則ち神の意に從はざるべからざるなり、全く他力に依るものなり、常に隷屬の位地を脫する能はざるなり、亦焉ぞ知らん「ノア」の大洪水再び起らざるとを、進化論の說の如きは則ち然らず、人類は自力を以て獨立獨行し、幾千萬刧の間競爭場裡に勝を制して遂に萬物の靈たる地位に達したりといふ、獨立と附屬、自力と他力、自由と束縛、自治と壓制、其差豈に余が辨を待て後に知らんや、亦近く一生間の歷史を以て譬ふるも其價直の差自ら判然たるものあらん、夫れ忽必烈は一大豪傑なり、豐太閤も亦一大豪傑なり、其功業のみに就て之を論するときは共に兄たり難く亦弟たり難し、然ども忽必烈は父祖積累の業を承け趙家衰頽の運に乘じ勢爲し易きものあり、之れに反して豐太閤は身を奴隷より起し襲驤虎視海內を抱括す固より累世の資尺寸の土なし、是れ其難たる忽必烈に倍蓰す、苟も英武天縱智勇絕倫に非るよりは焉ぞ能く之を致さん、豐太閤成業の難忽必烈に倍蓰する所以は則ち豐太閤の豪傑たる所以亦忽必烈に倍蓰する所以にあらずや、蓋し耶蘇教の說の如きは人間を壓して劣等の位地に下すものなり、進化論の說の如きは人間を引て上位に薦むるものなり、――余謂へらく生物界に進化論の未だ起らざるや猶ほ日月の昏蝕の如く已に起て生物界に起る自然現象の眞理歷然として顯はるゝや猶亦日月の其舊に復して光采炫耀し萬景俱に新なるが如しと、小にしては社會一般に鴻益を與へ大にして吾人々類の品位を高むること更に幾層なるを知らず、故に余斷じて曰く進化論は宇宙最大の理論にして萬世不易の原理なりと、又曰く吾人をして吾人々類が萬物の靈たる眞價を知らしむるものは夫れ此進化論の勢力なる哉と、嗚呼大哉進化論の勢力也矣、（完）

史　傳

國學復興者としての契沖阿闍梨（續）

緒論　第三　下河邊長流と契沖阿闍梨

埋木乃翁

契冲世に出でぬる頃世の國學者は唯一人の契冲のみにはあらざりき。細川幽齋の門より出でたる松永貞德は、百人一首抄歌林樸樕などを著しゝかど、國學者として世に知らるゝよりは寧ろ花の本の宗匠として俳諧者流として多く世に知られき。其門より北村季吟出でき、季吟は殆契冲と時を同くして出で、幕府に召れて歌學所となりて時めきしかど、其著書は湖月抄春曙抄拾穗抄など大方古書の註釋にして、それも又大方古註釋をとりあつめたるものに過ぎざりき。季吟が斯く歌物語の註釋に力をつくしゝは後進の人をして多少據所を得せしめたるの功績少なからざるべけれど、さりとて當時長夜の迷夢を破らん程の曉鐘とは聞えざりしならむ。あらず、夢の中に夢を結び迷の上に迷を重ねたるのみなりき。

此幽齋一派とは別れて一人の國學者ありき、もと大和宇宙の產にて若き時は彦六共平と名のりけるが、後母の氏を冒して下河邊長流とぞいひける。中年の頃より押照る難波の市に移り、閑居たゝ書を友とし、萬葉集に精しく、和歌を嗜みて姿も調も下れる世の樣には似ざりけり。闇夜の梅、隱くすとすれど自ら高き譽世にかをりて、其わたりの人事へて學ぶもいと多かりき。さはれかいなでの富家などには己が心を得ざれば招きにも應へず、光國卿の懇命をさへ草案の紙と共に反古にして打捨たる屈物なりき。されど如何なる宿世の緣なりけん、契冲とは伯牙鍾子期啻ならざる交を結びき、契冲が十七歳にして初て百首の歌よみける時、長流は三十三四歳にて大坂に時めける程なりければ、其百首歌を見せけるに、長流とを見ていたく驚服したりとぞ。其歌の一に

行きかへる雲打眺めつれづれとひとり起き伏す嶺の庵哉

此歌の意やがて長流のこゝろに通ひたるなり。長流は頭をこそ薙らね、世の塵を高くのがれたる在世の僧なりければ、契冲のこゝろ高きによく似通ひたり。こやそも二人が交を結びし緣の絲ならむかし。其後もたえず歌をもて交ひを繫ぎたり、契冲久井の里に赴ける後、

諸聲に今は春へといつ鳴かむ並の池の底の蛙は」と云遣りて我なき跡は寂しからむと慰め且

君もいつ庵並へて中垣の一木の梅を二木とも見む」などそゝのかしければ、長流

諸聲に並の池のあせさりし時を蛙は戀路にそ鳴く」又

我もいつ庵並へて松垣の隙なく物を君と語らむ」など答へ、山里閑居の樣を想ひやりては

和泉なる泉と聞はすむか上にすまむ久井の底そ知らるゝ」と慕ひ、遂に

世の中のわたらひ艸をふみならし山路の蕨いつかつまゝし」と契冲の閑居を訪はんとしければ

早蕨の萠えむ春にと賴むれは先手を折て日をや數へむ」と待わび、長流は又

岩そゝく久井の垂氷解なんと我早蕨の折急く也」と堪難きの情を洩らせり。これ等の歌を味はば二人が志を同くして世の塵を避けんとつとめたる事を知るべし、且二人憂を同くし人に先ちて和歌の衰替を慨みき、長流の歌に、末の集の歌どもの昔の歌に多く劣り行くと見ゆる、とて

難波津の流におふるあしつゝの末の世見えて薄き言の葉」契冲は又「古今歌の趣の異なるは詠めると作れるとによれり」といへり。實に二人は心からの友にして、又學びの友なりき、前後三十年の間始終をつくしたる無二の親友なりき、されば契冲の方よりも

我を識る人は君のみ君を知る人もあまたはあらしとそ思ふ」とまで賴み思ひ聞えけるを、遂に

長流貞享三年六十三歳にて身まかりければ、さらぬだに厭世の心深かりし契冲はいよいよ浮世のはかなきを感じたり、其折の歌

わたり川照日や知らぬみな月に長き流も絶えぬしものを」

はかなさの世の例なる蟬たにも秋待つ程を人そ聲せぬ」

長流は妻子はもとより身寄のものとてもなかりしかば、契冲自ら送りとぶらひなどまきにすまし、妙法寺の境内に石碑を建てたりとぞ。曩に長流は契冲の歌を集め漫吟集と名けて世に公にし、己之が序を書きて之を賛へしが、契冲は又長流の沒後其遺稿を集め晩花和歌集と名けて世に出せり、其序の中に長流を評して、「松の葉の霜を凌き呉竹の時雨に爭ふ操ありて思ふとちに交りては赤き心をあらはし疎き人に向ひては青き眼を見する事なし爲人斯道を好みて云々」、といへるは、げによく友を識れる言葉にして又やがて己を描し出せるなりけり。安藤爲章曰く、「長流は儒學まさり契冲は佛學に深し在家出家の樣は異りたれども清操共に昔の隱逸にも劣らぬ人品なりけらし」。二人が其性情意向相近く親交いと深かりし由は、くだくだしく上文に述べつるにて知らるべし、尙少しく辨へ置く可き事あり、そは斯く心合ひ交深かりし二人の間に唯一つのけじめありて、長流は契冲よりも多く世を輕しめたる曲物なるからに、契冲はむしろ世の爲に力をつくせる義俠者なる事なり。長流はげに光國卿のねもごろなる依托をも塵ひぢの如捨てゝ顧みざりき、其さがは

岩根ふみ固めし心今更に浮世に動き出てんものかは」、とよめるにても知らるべし、されば長流の著書として世に知られたるものとては、僅に萬葉集名寄、讀歌林良材集、などの歌書あるのみなり、此世に現はれたる形跡の上より觀れば、長流の國學に於ける功績は實に貞德季吟のやからにも及ばざるべきか、しかすがに裏面に深く隱れたる事情を探れば、長流は契冲てふ國學者の先に出でゝ荆棘を排し分けて道の栞をなしゝ人なる事知られなむ。

先にも述べつる如く、契冲初めて敷島の道に分け入りし頃、長流は既く斯道の先覺者として、大坂に古躰の歌の門を開きてありしなり、されば契冲は長流を深く慕ひ厚く敬ひ、講話を聽き著書を繙き、乃至己の作歌の添削を乞ひ、啓發指導を受けたる事少からざるのみならず、長流の遺業を受けつぎたる事もいと多し、例へば契冲畢世の大著述ともいふべき萬葉代匠記は長流の書殘し置けるを本とし、彼人に代りて作れるものなればとて、代匠記を名けて其功を亡友に讓りき、古今餘材抄も其自序に云へるが如「友とせし故下河邊某が菅家萬葉集紀氏六帖これらにある此集の歌の違へるを傍に書付けたるを捨てじと思ふより又物の端に記しおける事をも捨てじと思ふより事起りて」斯くは編り成しゝものなり、百人一首改觀抄も亦しかなり。しかく數へもて行かば、長流の遺しつる事業が、契冲を待ち得て成れるものも少からぬ事を見るべし。幸にも前に長流てふ先導者出てたればこそ契冲は短生涯の間に容易く事業を成し得たるなれ。又幸にも後に契冲てふ繼述者出でたればこそ長流は其沒後思もかけざりし名譽を世に殘したれ。此關係も亦國學復興の上に少なからぬ影響を及ぼせり。

因記。契冲が師とたのみて國學を學び傳へたる人は誰にかありけむ、こはまづ研究す可き問題ならんを、古人の之を論ひたるを聞かず、又物の本に記したるを見ず、されば明にこを知らん由な

し、これなきはやがて師なかりし事を證すものなるやも知る可らず。按ふに當時の文學界の有樣は前に既に述べつるが如くなりければ、師とたのみ聞ゆべきほどの學者は求め得られざりしによるか。さて伴蒿蹊の畸人傳には、「此師の歌學顯昭法橋の說を梯として古書を見あきらめられしものとおぼし」、と憶測りて强て古人を捕へ來りて、師ありきとなせり、之をしも師といふ事を得可んば師ありきと云も不可なからむ、さはれなほ當時の先醒の何人に事へて學びしかを知るに由なし。前に長流の惠を受けゝむ事の大なるを述べたり、又假名世說によれば歌を清水谷實業卿に學びたる事ありと云。よしそを事實とするも、共に唯詠歌の上のみに限る事ならむ。要するに、契冲は自ら勉めて博く古書を探り、自ら自己の識見を作りなせるものか。

第四　契冲は如何なる人なりしか

時勢は契冲を驅りて文壇に上らしめぬ、友は契冲を輔けて事を成さしめんとす、さらば契冲は如何なる人なりしか、よく此重き任に堪え得可き人なりしか、さなり契冲は人と爲り人に勝れたり。契冲生れながらに記臆力强かりける事は其生涯の條下に述べたれど尙一話を添へんに、或人如何ほどの歌數を暗記せるかと問ひたるに答へて、三千首以上は我今知らず、といひしとぞ。浮世の浮きたる榮利に累つらふ事なく唯一すじに斯道に勉めたる事、私を捨てゝ公の爲に盡し且其さが温和なりければ上光國卿より下伏屋長左衛門に至るまでいづれも契冲に信服し、又友垣の間の信義を守り總て道心堅固なりければ先輩長流の愛顧を得、共に其事業を成す上に少からぬ便利を與へたる事等は、上文に略ぼ述べたるにて知りぬ、又清水濱臣の泊々筆話に、

吾師(村田春海翁)の常にいはれしは、契冲阿闍梨縣居翁などは、今の人よりは四目兩口もありし人のやうにおもへど、更に今の人に異なるには非ず、彼も人なり我も人なり、自ら誇るにはあらねど契冲阿闍梨などの如き其才氣をたぐらへば、我も此人達に劣れりとは思はず、絕えて及ばぬ事は此人達は精神健全にして若きより老の身に至るまで學の道に倦む事を知らず、極めて勉めし人達なり、とある如くよく勉めたる事は容易く想像し得らるべき事實なり。

契冲は又其身稻衣を纏へしかど、其魂はかいなでの法師といたく異なりき、佛門に入り佛敎は學びたれども、其魂は佛心にならざりき、佛心にならざるのみか、漢ぶりをもいたく排斥したる純日本人なりき。遠江國高根某所藏契冲眞蹟「きなれ衣」と題する一篇の文は之れの好證なり。

我着馴れたる衣は色あひしさまめでたきも何とも思ひたらず、人の着たるは珍しきに目移りて怪しう美しう見なしつゝ、いかであれがやうにと思ふぞ人の心の慣なりける、されば物學ぶにもこゝの神代の傳への誠なるは、たゞありなるから見立なく思ひて、賢けにものしたる唐の書をのみ頂に捧ぐる人の多かめるは道理なるものから、よく思へばあやしき事ぞかし。我御國の古の御手振は、神の御心のまゝに萬の事長閑にめでたく、いはばたてぬきの糸細く美しきを七夕にも劣らぬ手して織りたらんが如し、彼國振はいと猥りかはしくわろきを繕ひなして言よげにいひたるは、譬ば絲のふつゝかにをさの粗くて見苦しきを紛らはさんとて花やかなる色に染たる衣の如し、(中畧)さるを漢書の博士などは此道理を得知らで、けふの細布胸合はぬ見苦しきかり衣を自よしと思ふまゝに我物貌に心をやりて誇り居るこそ片腹痛けれ。(下畧)

此はたゞ世の漢學者を罵るのみにあらずして、皇御國に生れ出でたらんには先づ皇國學を學ぶべきものゝそとの深意なりけらし。契冲が佛にも入り漢をも窺ひしは、やがて己の見聞を博め國學講究の資に供へむが爲のみ、五十音の上にも悉曇の學を參考し得たる事の甚多きをや。木下幸文の契冲を評せる言葉にいへり、「唯奇しく大和魂ありて古今に至らぬ隈なく强記萬人に勝れて自然成れる學なり」、

契冲人と爲り此事業に適する性狀と力量とを有せるが上に、外來の刺擊さへ加はりたれば、天人冥合、斯くは國學復興てふ大事業成りしなり。天下大事業の成るは自然成るものにあらず、又ま ひて成さんとして成し得可きものに非ず、要するに自然と人力と相須ちて始めてこゝに天地を貫き古今に通ずる大事業は成るなり。

以上は緒論として、いかにして國學復興なる事起りしか、いかにして契冲之を起しゝかを明かにしたり。いざ本論に入りて、いかばかり國學復興は成りしか、いかばかり契冲之を成しゝか、即いかばかりの力を國學復興の上に致していかばかりの功績を世に遺しゝかを論はんとす。(嗣出)

文苑

某氏に贈りて兒を擧くるを祝す、

虎嵓老

遂古の初溷沌として雞卵の如きの時、清輕なるものは上りて天となり、濁重なるものは下りて地となる、天は象を垂れて日月星辰上に運行し、地は形を派きて山嶽河海下に羅列す、天は曠々として地外を圍み、大地形を備具して自ら首尾あり、隆然摩天扶桑木の下、粹然として天地正大の氣は鍾り、秀てゝ超然富岳の高となり、注て洋々大瀛八洲を繞くり、發して爛熳萬朶の櫻となりて天眞の國魂自らその中にあり、これこれを何とかなす、實にこれ率土の首、天日の照臨するところ、陽氣の發するところ、絶東蜻蛉の神州にあらすや、嗟乎彼れの水、彼れの山、彼れの花、此間冲和の氣凝りて人と生る、造化の意豈にそれ偶然ならんや、大人茲に乙未追儺の節を以て、神州の中樞北溟の天、一男兒を擧く、余豈に驚喜手を拍て賀せざるを得んや、今や外は百萬の貔貅遠く寨外にありて魍魎の蠻清を膺懲し、連戰連勝雞林の妖氛を拂ひ、進んて滿地に入りて九連鳳凰を蹂踐し、夙に旅順を陷れて齊地威海を威とし、陷落の快報も亦まさに近きにあるの時、内は戻々儺名を稱へて魍魎を拂ふの日、實に此の日を以て此兒茲に生る、思ふに既に心中の賊を掃ふて元常を認め、色身の外にありて眞心妙覺を得るものならんか、希くは此兒天下偉大の人たらん、言ふと勿れわが族將種なしと、王公將相豈に必らずしも種あらんや、思ひ見よ猿郎果して何れよりか起り來れる、碌々竹阿彌は彼れが父たるにあらすや、然かも絶海樓船震大明、漢祖果して何れよりか起り來れる、區々泗上の亭長よりせるにあらすや、然かも亂麻を收めて萬乘に君臨す、陳平果して何れよ

りか起り來れる、微々小社の宰よりせるにあらすや、然かも漢祖を輔けて天下の大宰となる、嗟乎此の兒こゝに神州に生れて此の佳節に逢ふ、思ふに岐嶷異鱗以て箕裘を繼き、今の呱々乳を索むるの聲、他日三軍を叱咤するの音ならんか、余豈に驚喜手を拍て賀せさるを得んや、然りと雖も此兒獨り大人の物にあらさるなり、實に是れ宇宙の兒、乾坤の子、神州の相繼者、　至聖陛下の臣民矣、嗟乎大人希くは此の兒をして、此の佳節に逢ふの瑞により、天の與ふる所以のものを棄てす、蕭陶苟もするとなく、卓然たる天下の偉才たらしめよ、大人や既に業に一女のあるあり、温厚訓養親しく膝下にあり、今や又此の佳節を以て一男兒を擧く、誰れに向つてか將た又備はるをそれ求めんや、これより一家團欒和氣陽々の樂、更に大に今日に倍蓰するものあらん、嗟乎可慶可慶、聊か蕪辭を列ねて祝意を表し、幷せて此の兒の前途を卜すと云爾、月日

友を諫むる文になぞらへて

孤鴻子

拜呈仕候其後は絶えず御伺ひ申上くべき筈の處心にもあらで御無沙汰仕候は全く例の筆不精ゆへと不悪御海容被下度候貴兄には御變りも無之御消光の御事と重ね〳〵御ことぶき申上候當地にては御母上樣初め數ならぬ我等まで不相變無事に起き臥し罷在候間御安心有之度候偖て性來愚鈍なる我等が才賢ぶりてかゝる事申上候はんは釋迦に說法とやらまことに嗚呼がましきわざには候へども心の中に思ひながら申さずに打過ぎ候は日頃より貴兄が厚き御懇情に對しうしろめたき次第と存候へば心に考へ候ふしを申候て御賢慮の程伺ひ度斯る事申上候小生が心の切なさ御推察被下度候そも貴兄が修學の爲めにとて故郷を離れ遠く東都の月に志を磨きそめたまひしはみとせあとの事にしてそれよりこのかた螢雪の苦學積み重りて最早近き頃には多年の御本望相達し首尾よく御卒業被遊候はんと我等も指折り數へて御待申居候ひし處風の便に承り候へば何事ぞや貴兄には近頃よからぬ所に足踏み入れ玉ひ學問中の身にてありながら道ならぬ御振舞有之候由初めの程こそ傳ふるものゝ誤かたゞしは聞き間違にもやと念頭にもかけず打過ぎ候ひしもかゝる噂の二度ならず三度四たびも耳に入ればあながち風なきに波動く事とも存ぜられずもとより左樣の事無之候はゞ無此上喜ばしき儀とは存候へども若し萬一にも此噂まことなりとすれば賢明なる貴兄におはす故唯一時御心の迷か但しは他に深き御所存ありてのことは存候へども武骨なる我等一向合點仕りがたくかくては九仞の功を一簣にかくとやら誠に殘念なるとに奉存候君子は過なきを以て貴しとせず能く改むるを以て貴しとすとか云ふなる本文も候へば何の苦しき事や候べき一時の迷は誰しも有之ならひ斯くと御心付きたまはゞ一刻も早く御改心

の程こそ願はしく存候へ此間も貴兄が御母君を音づれまゐらせ候ひしに御氣色の常ならずいとうれはしげにおはせし故何事に候やと御尋ね申上候ひし處さればとよ聞きたまはれ親の心は闇ならねども子を思ふ路には月もてらさずとかや悴事幼き折父に別れ我手一つにて育て上げしかば人中に交りても母親育ちの子と云はるゝが口惜しくもし悪き道に迷ひもやせんと夜もろく〳〵に寢ねしとなきまで唯すら成人を待ち詫びしに十八歳になりし時學問修業の爲めとて其請ふにまかせ都へのぼせしはわが過親の口から言ふにはあらねど生れ付のさまで愚にはあらずとて人にまで誇りし彼がいかなる物の魅入りしにやよからぬ友と交らひそめて月雪花の遊が長じ悪しき巷に迷ひ入りては腐り學びの道も手につかねば學校にても評判甚だ面白からずと親しき友達の方より彼が此頃の身持有樣悪くしたゝめてわざわざ我に告げ越したまひぬ思へば先頃より送り越せし手紙毎に書籍のしろや衣の料とて金呉れとのみ言ひ來しゝ事のあさましくいかに若き心の分別なきとはいへかゝる樣にてはこれまで育て上げしわが艱難辛苦も水の泡亡き夫の位牌に對しても向ひまひらする面なしとてさめ〴〵と伏し沈みたまひぬ我等も悲しさやる方なく樣々に慰め申しあまりに御心遣ひ被遊候てもし病みわづらひもしたまひなば此上にも心苦しく候べし我等如何やうとも計らひ候はんと申しなだめて歸り候ひしが其時つら〳〵御有樣を見申せば手木綿の糊强き筒袖召してはした一人使ひたまはずに日々他人の賃仕事して我子の爲めにはわづかの金もと入用の品も調へずに過ごしたまへるさま見るにも涙のこぼれ候母君はかほどまでも苦心したまふなるに貴兄は猶ほ新橋に月を弄び北里の花に戯れてあだに月日を費したまふとの空恐しとはおぼさずや今にしてやみたまはずは彼世此世の御兩親に對しては申すまでも無之御先祖代々の方々に對しても限なき御不孝に可有之候其上貴兄が御一身上にかゝわりても行末長き花の蕾に今かく悪しき蟲の喰ひ入り候ては咲き揃ふ春のあしたに如何ばかりかくやしかるべき事と存ぜられ候單に後來御出世の障ともなるべければ此際例へば如何樣なる事情の有之候とも父母にはかへ難く身の行末にはかへ難き事故秋水一閃千百の障害誘惑も斷じ去りて暫く心根を木石に比し此迄の如く一意專心學業に身を委ね最早眼の前に見えたる多年の御望も達しやがて錦を飾りて御歸鄉被遊候はん節は我等も諸手を擧げて御迎へ可申候斯くなる上は何事も心のまゝにて御先代御兩親に對しても御孝行無此上又國家に盡すつとめも之れに越す事御坐無と存候何卒〳〵此言葉を以て愚鈍なる我等の口より出でしものとはしたまはず母君の御口づからさとしたまひ御先祖の御手づからものしたまひたる御教訓と思召して幾重にも御聞き分け被下度まわらぬ筆の前後錯亂仕候て書き續くる中い

つしか言の葉のなめなるふし有之候ともそは我等貴兄を愛慕のあまり血汐の涙しぼりて書き綴りしものに候へば言葉はとまれ其心を御汲取被下候て吳れ〳〵も御聞入れの程萬々奉願候尙ほ時下餘寒なほ酷しく候間御自愛專一と奉存候殊に御病身の貴兄におはせば一層御保養可有之と乍憚存じ上候又當時春季御休暇の事と存じ候間萬障御繰合せ一と先づ御歸鄕被遊候はゞ自然御母上樣の御心も和らぐ道理にて萬事好都合と勘考仕候草々頓首　月日

諏訪紀行

明治壬辰之歲黃鐘上旬。余寓於信州松本。企諏訪紀行。曾遊之快未嘗忘於懷。當時有紀文但恐才淺筆拙。殺其風景。或觸山靈水伯之怒焉耳。

十一月七日。陰。昧爽出菌蓐食。乃理行李。與天民瓦全之二生。發軫上旅程。比抵新田驛日過巳牌。乃憩一茶寮。亭午着于鹽尻驛。息一榭胠橐啖角飯。出則峠口矣。峠曰鹽尻峠。道傍之行松。欝々垂枝。翠綠欲滴。白日猶覺暗。宛如行隧道。登十數町。天民顧余指一峰巒曰。視焉此山頗似藤肥州之冑。因名曰兜巒。方是時峠少急峻。乃鼎鼎魚貫而登。至峠巔萬目豁然。而諏訪市街見模糊之中。如鏡中象然。當西鵞湖汪洋澎渤。而水先瀲灩接天。風帆雲鳥遠見於杳靄浩濤之間。山脈之所斷。富嶽躍出於其間。倒映寫水中。頗爲佳矚矣。天民鄕里屬諏訪郡。而行孔道則爲迂路矣。於是乎辭去。比達下

諏訪日已晡時。乃詣乎春秋二宮。々闈之華表燭籠。俱以銅鑄之。高三丈有餘。壯觀堪驚焉。乃往至陛前。虔肅兇拜。下而抵上諏訪。投逆旅牡丹樓。于時日既暮矣。

十一月八日。　此日輕陰如呵鏡。朝饗乃詣于神宮寺。華表燭燈亦爲銅鑄。大輸一籌於下諏訪。至神前膜拜以禱。還而抵于公園。園在城墟。名高島。石垣疊々。蘚苔生焉。濠渠繞之。有橋架之。而敗荷在渠。適泣於金風。園植以梅櫻。泉石配置亦得宜。每花時至。邑之士女。鞭影衣香。相俱賞花酌酒。率以爲常。行數武有一庵。備榻待客。庵側有碑。文中洲三島毅之所撰。而書三洲長芡之所揮毫。步而登一丘。諏訪市衢在眼下。西望湖水涵澹渺々無涯。漁舸畫舫點々於其間。南則杳冥之內現不二。白雪皚々。而烟雲繆轕掩其岫。瓦全曳余袖曰。天晴波穩。往買舟一遊何如。余乃諾往叩舟舍命之。舟人輙頷。艤短槎以待之。余乃與載酒而乘焉。舟人操縱孔熟。少焉離岸數段。舟人豫備巨槳。探瓦斯觀之。時已過申牌。湖面玲瓏坦然如鏡。漣漪徐送。夕陽映之。輝々如投金砂。快無極。於是相俱擧觴。叩舷而嘯。須臾日漸昃。暮色蒼然而至。既而漁舟皆歸。欸乃漁歌遠近相答。而前美景索然歛迹。徒見漁火數點明滅於汀渚耳。乃命舟人轉柁而歸焉。當左層樓嶙峋攄天。丹碧斑々而眩目者。爲銷金鍋。既而舟着舟舍。乃謝舟人。歸逆旅。

十一月九日。　陰。裝束發諏訪上歸途。亦於鹽尻驛午餐。取路於五千石街道。經片丘壽之諸落。抵村井驛息一亭。達寓時。漸酉牌。越一夜。則躬槳。以爲之紀行。

冥邦會誌蘇生記

豐泉逸士

故學友會雜誌者、加州金城之產也、夙憂學海之擾亂德義之頹廢、欲匡正之也久矣、遂明治癸巳二月、決然載筆硯而生尾山之麓、以從操觚之業、爾來孜々勵業、汲々從事、頻痛論仁義之衰亡、又慨說大道之頹廢、功蹟顯日、名聲揚月、人以爲學海之羅針俗界之木鐸、頗矚望矣、然甲午盛夏之候、怪風一吹、蠹蟲生腹、十月遂溘焉而逝矣、莫天下不歎其不幸焉、會誌(學友會雜誌以下倣之謂)爲黃泉之客也、矇乎行東方數千里、越劍山、橫火野、渡三途之大河、苦步難行旬餘而達冥府、只見鐵門巍然聳中空、而幾百之獄卒皆裸躰、或赤髮双角、或綠鬚隻牙、悉杖鐵竿、吐猛火、凄滄不可謂、會誌驚問曰、是何邦乎、獄卒笑曰、地獄焉、會誌聞之心慄氣沮、既莫生氣矣、則赤鬼來投會誌於牢隅之一室、超數日、冥官使會誌立大鏡之前、以照見往日之罪過、不和之蹟、不信之痕、歷然如睹、冥官見之大歎曰、甚哉會誌之不倫也、自生民以來、凡日月所照、雨露所點、未有如斯甚焉者也、則奏閻王曰、今一異人來於西土、謂友誌、頗長文筆巧辭藻、而顏貌憔悴、形容枯槁、如甚沈憂患者、乞判罪焉、閻王則整衣冠、取赤笏、設席於棘木之下、以聞罪矣、冥官侍左右、衆吏獄卒皆有後而參聽矣、閻王則發破鐘之音問曰、爾弱冠有何罪敢來我獄、會誌戰慄恐惶垂涙僅上頭曰、吾聞王府固公明正大、有罪者必罰、無罪者必恕、今我不幸無罪而落此獄、然妖鬼獄卒妄苦余、酷待莫不至、如此豈所以大王建獄府明刑罰也哉、閻王沸然怒曰、咄痴漢敢妄弄佞辯以欲瞞着朕豈可得乎、熟查汝所言、後罪過之輕重、而先訴痛苦之甚、何其言之巧而其辭之猾也、汝不知乎明鏡有前典刑有後、夫明鏡所以察罪而典刑所以取法也、然汝不察之、巧辯佞辭以蔽己罪惡、蓋弄辭罪已深矣、況僞人乎、會誌潸然流涙喟然歎曰、嗚呼大王之何言哉、雖余不敏又東海之男子也、清廉如蓮、潔白如雪、則萬人已所認、以學海之羅針、俗世之木鐸、自任者、豈弄佞辯焉、況僞人乎、初余之生金城々裏也、千艱萬苦交起、年來之宿志、自任之鴻圖將空歸水泡者數矣、而能排能除、羅針之實漸將顯之時、忽然腥風捲地起、天沛然降怪雨、羅針傷矣、木鐸破矣、內訌外難起一時、民衆各立派、結黨西呼東應、舉天下以將沈滯化怪雲妖霧之中、嗚呼同學不和、朋友不信、怨恨愈重、危機愈迫、抑是何之兆哉、夫研智養德是豈非學生之本分哉、然朋黨如彼怨恨如此、欲不歎亦不能也、嗚呼天乎命乎將運乎　壯圖空齟齬而宿志不就　有何顏以見天下同志　思至此血涙滚々衣袖爲濕矣　余爲廢食旬日、說西論東、以雖謀仲裁奈盤根錯節而微衷不達何、且夫大廈將倒非一木之所支、洪流將潰非一俵所防、病根發因於茲、遂至自滅之不得止、何計見大王於茲、孔子不言乎窮鳥入懷我不忍殺之、今我落冥府、雖事異而情一也、況無罪乎、大王憫察之焉、閻王瞋目踏地罵曰、嗚呼爾何過本末之甚也、唱正義而欺他、口道德而僞人、且夫汝非以學友爲名乎、而不信如彼、不和如此、大道克復之名其有何處、是實自欺又欺人者也、自唱而自破者也、夫不踏正道而欲匡正德義

之頹廢、尙以盲笑盲、誰不笑其愚焉、諺曰燈臺下暗矣、其汝之謂乎、則顧冥官問曰、朋友不信、同學不和、以可處何刑乎、冥官進奏曰、夫朋友有信、同學有和、是人倫之大道也、玆以孔子置之於五倫之一、次忠孝重之、然彼今背人倫之大道、罪甚大矣、當墜無間地獄也、永刼之久未世之長、不得成佛、閻王曰眞然乎、蓋五刑之屬三千、不倫莫大焉、雖然聖經有贖刑、彼有善則朕其贖之、彼有善行乎、在即告焉、吾赦之而已、冥官怪曰、小功不足以償大過、小善不足以掩大惡也、不和之罪不信之過、焉得償之哉、閻王曰善矣、再謂會誌曰、熟察汝情狀、頗有可憫者、敢問汝嘗有善行否耶、會誌見機熟即熱心答曰有之矣、大王乞聞吾所述焉、初余有前世也、一時洋風排然壓我土下、國民之元氣消摩日、德義頹焉、大道廢焉、學海之荒寥達其極、加之賣友僞師、沈湎酒色、耽溺遊隋、而恬然無愧、頑然無顧、苟憂國慨世之士、豈可默乎、嗚呼忠君愛國之四字、是豈非所以我神州卓絕宇內哉、秀爲芙蓉之峰、注爲大瀛之水者、豈非神州之正氣哉、而今也學生不仁不義無禮無德其如斯、嗚呼高慢之風繞富士、奢侈之水注琶瑚、內之損神州之威嚴、外之受夷人之侮蔑、若夫以此勢不止、奈我國家何、奈我學海何、所以余於金澤從操觚之業者實爲之也、然所以亡滅至於此者、誠是天也命也時不到也運不會也、誰謂我不倫矣、雖然男士一旦抱大志而立世、豈猥廢素志者哉、他日察時謀機、又將有大所爲、大王願察焉、閻王曰所以汝亡滅者、是非運不會時不到之故、以誤機也、當時汝一族意志未明、團結未固、而輕擧企大事尙柱礎不堅而建家也、焉可堪久哉、是以君子行事必於機焉、故無過矣、如爾是固野猪之業而已、容氣之行而已、故以不和衝突遂至招滅亡、抑亦不可憫之至哉、醜觀當今汝舊友之狀態、龍南會雜誌樹旗於阿蘇山下、光燄萬丈意氣既呑西海矣、校友會雜誌搆中堅於武藏野頭、筆鋒銳利有快刀斷亂麻之概矣、其他山口之學友會仙臺之尙志會、各割據於一方旌旗堂々雄視天下、前呼後應　以竭力於挽回天下之頹風、匡正學海之不德、猗歟可謂盛矣、然獨北海之濱白山之麓、寥々戚々亦不聽其聲、豈非汝之一大耻辱哉、嗚呼丈夫生世無寸効、有何面目又見天下同志、汝之胸中又堪憫察焉、夫汝罪甚重雖當墜無間地獄、而汝之興廢以關北陸學海之消長、如强落之豈朕所以造獄府明刑律也哉、故以今回殊宥免汝之罪、汝其奮興勇進、寇北辰之名再生尾山之下、以繼前志、輕擧如過事實朕所不取也、爾其勉焉、會誌流感涙謝曰、高勅徹肺肝、一死以報高恩耳、大王幸安焉、飄然去而不知所行爾云、」

仰眺白岳之玲瓏、俯望犀江之清流、豈非清麗山水哉、而所以北辰會雜誌之生此地者、抑亦不偶然也、聞說山水秀麗之地古來多偉人、夫汝之謂乎、汝須精勵奮興、耐千辛忍萬苦、勇往直前、如北辰之燦々、越雪之皎々、發輝其所志、上以答所以閻王殊宥爾、下以答所以衆生迎汝焉、嗚呼北海波荒、越野雪深、排除之汝之責也、敎導之亦汝之任也、汝責任可謂重且大矣、今梅花笑南枝、柳芽綠江邊、眞得天之時兼地之利者也、已有此二利、得人之和亦易而已、實可謂能知機者矣、易曰知機其神乎蓋汝之謂

乎。汝其勉之焉。今方北辰會雜誌之誕生之時　余作此記者豈爲徒弄文筆哉　實有慷慨不能止者也讀者其諒焉

丁汝昌

在韓　望南樓主人

わが艦隊のほろぶまで。　　ものが務も終りけり。
我軍兵の盡くるまで。　　いでやこの世をこゝろよく。
花々しくも戰ひて。　　去りて眠らむ。夜見の國。

國と君との楯となり。
斃れて止まむと思ひしも。
あたら四千のつはものを。
底の藻屑といたづらに。
沈めはてむはいと惜く。
涙を呑みて力なく。
吾は建てけり白旗を。
白はたゝて降參し。
わがつはものを救ひては。

思ひ出せは九年前。
北洋艦隊ひきつれて。
東倭の國に進み入り。
長崎神戸横濱の
港せましと艦なめて。
雲に入るてふ黃龍の
國旗を風にひるがへし。
國の御稜威を旗風に。
誇りし事もありけるを。

紅葉館の高どのに。
朝野の名士招き寄せ。
うたげのむしろにぎはしく。
歌ひまひにし夜なりけり。
花のかばせの舞姫の
袖をまくらに醉ひ臥して。
つきぬなさけにむつまじく。
幾千世かけてちぎりしは。

あはれ其日に艦隊が
なかばゝ沈み半は降り。
またく滅びむけふの日の
ありとは。いかで思はむや。

あはれその夜に。吾とても。
命はきはまり運は盡き。

ものれと死なむ今日の日の
ありとはいかで思はむや。
咲きてはしぼむ園の花。
みちては欠くるそらの月。
榮枯浮沈は世のなかの。
常なりとしもいふなるは。
人の身の上と思ひしに。
今日は我身となりけりな。

浮世の旅の五十年。
今更思ひめぐらせば。
さめては眠る春の夜の。
夢ばかりなるうつゝにて。
迷ひまよひしそのゆめも。
今は忘るゝ外そなき。
忘るゝ夢のその中に

國と君とにつくしつる
わがまごゝろといさをしは。
死しての後に聞く人の。
こゝろ〳〵にまかせなむ

（完）

鄕村の老爺を吊ふ

蝶魂子

音信すべきにあらねども、
知らせな汝がゆくさきを。
問ふべき人はなけれども、
かたるな汝がゆくさきを。

汝がゆくへをつげずとも、
汝がむかしをいざかたれ。
汝がおはりをつげずとも、
汝がはじめをいざきかむ。

いな〳〵つげそなに事も、
語らむすべのなきものを。
ことうちあけて語るとも、
それをばきかむ人なきを。

なれが口よりかたらずも、
野邊の花こそしらすなれ。
われが耳もてきかずとも、
水のながれはことつげむ。

うき世はなれし草のかげ、
汝がすまゐのゆたけさよ。
ちりをのがれし苔のもと、
なれが領地のひろけさよ。

石のはしらにいしの屋根、
なれが住居とたれか見む。
つちのむしろにつちの床、
汝がうてなとたがいはむ。

いな〳〵憂そやすくゆけ、
さとりは心のまゝにせよ。
自然ののりをとやかくと、
語るはひとのさまぞとよ。

朝ゆふならすむらのかね、
汝がいさほとひときかむ。

みさほよそほふ青おもと、
なれがむかしと人は見む。

五十路の夢のけふさめて、
さむるまもなくまた眠る。
眠はふたゝび醒めがたき、
ながき別れとかくごせよ。

昨日も今日もゆきすぎて、
すぎこし方をふりかへる。
夢よりいでゝゆめへゆく、
彼もなれ逐ふひとのかげ。

いさほ殘しゝなれのはて、
春のすみれとさきいづる。
名譽は消えて消えがたき、
葉末のたまとかゝやけり。

なれし夕べのかねきゝて、
月をまるべにかへるなる。
里のこどものみちばなし、
なれが歴史をのこしゆけ。

（終）

釜山月

在釜山　樂一道人

其一

あはれ月。
故郷をあとにはるゝと。
釜山が浦にきてみれは。
いつこも同し影なれど。
岫の上に、
光をさそふ雪もなく。
園の中に、
にほひを送る梅もなし。
高殿に、
まとを開きて筆とりて。
歌よむ人もあらぬなり。
地はさまゝ
人さまゝの世なるかな
月影のみはかはらぬと

其二

あはれ月。
八重の汐路をはるゝと。
釜山が浦にきてみれは。
おなじ海をばてらせども。
波の上に、
烟ふきたす艦もなく。
水の面に、
金波を破る風もなし。
欄頭に、
されと今宵も太刀とりて
舞ふつはものは絶えぬなり。
月の心。
わかますらをは學ぶかな。
ところの樣は變れとも。

歌

和歌三首　大林德太郎

苗代　君か代の恵の露にうるほひていよいよおふる小田の苗代
新竹　年毎に生ふる若葉の數そへて千代をさゝやく庭のわか竹
六月祓　むかしたれけふの夕の川水に身の罪とかをはらへそめ劍

春の歌五首　長連恒

山霞　みるかちに遠山うすく霞めるは春にもれさるこゝろなるらむ
朝霞　さほひめの霞のそてにうつろひてときくれなゐの朝日影かな
春草短　枯のこる古はのひまにもゆるなりなほはつかなる野への若草
水邊春月　なにはかたあしの若葉に風たえて月はなみまに影そかすめる

閑居紅梅　けふはしも人やとひこん世をそむく庭もこそめに梅の咲れは　星野光

近詠五首

立春　廣島の假りの都ゆ春立ちて高麗の荒野ものとけからまし

野若菜　み雪ふる越の乙女も春來れは野に打むれて若菜つむなり

月前花　ふり捨てゝ行かれさりけり朧夜の月に成行く花の下かけ

松間花　吹風になひかぬ雲と見ゆる哉松の木の間のやまさくら花

題不知　咲花に浮れて出でし宿なから散ぬれはまたなつかしき哉

歌二首　島村他三郎

舟見山　ほてうちて勝ときあくる皇軍の舟見山てふ名もはしき哉

春祝　皇軍の唯勝間田の池の邊に若菜つみつゝ君をこそいはへ　香村茂富

同

庭上柳　風そよくしたり柳は庭のおもにあらそひすなとさとし貌なり

武内宿彌　大君のみつえとなりてから山のおとろふみわけみさきなし劍　石井循

寄海祝

かきりなく果もしられぬわたつ海つきせぬ御代の姿とや見む

發句

雪三日雨は七八日年のくれ　臥松

手取橋手にとるほどに鶯が

電信のはり金寒き越路かな

雲遠き藥師寺山の霙する

川口や干潟にならぶ雪の船

雪の舟雪の橋下通りけり

悲友人

陽炎のあばし浮世に燃に鳧

賤が嶽にて

置く露は幾益荒雄の涙かな　子研子

柳瀬にて

瀧車見つゝ飯喰ふ宿や月の宵

眼には青葉耳に鶯清閑寺　吐虹

北風や一本杉の朝ぼらけ

風白く捨子啼く夜のさむさ哉

猿啼て寒月低くやまたかし

喃旅僧われもむかしは槍の主

雜錄

李婉兒（承前）

泡紫魔生

史を讀み卷を抛ち大息一番『噫、斯羅馬人今何處にか在る、彼等の德操と正義と力今果して那邊にか存する、噫予彼盛代に遭遇せざりしは何等の不幸そや』と絶叫せし李婉兒は自、顯理七世の落胤と稱すれ共猶是猿太閤の何がしの　皇に於けるが如し、筑阿彌とも云ふべき父は旅亭の長、母は洗濯女とかや、素より地位と財産の傳ふ可きは莫し、唯辛き中に授けし教育こそ他日雲蒸龍騰の萠芽となりたれ、いで其頃は千三百四十三年意國五州に分れし割據の樣物々しき裏にアヴィグノンなる法王許へ羅馬共和廳より送りし使節に副たる平民十三箇中、身の賤さと貧さに冲天の志空く涙を呑みて過報拙きを嘆きし李婉兒今やクレメント六世の知遇を得て僧院の書吏となり五フロリンの月俸よりも有難きは行方に開け初めし青雲の梯なりき。『是ウルシニ奸賊の所爲耳、我誓て卿が爲に仇を報せむ』と　放言せしコロンナが虐殺の血は自家の流しゝものなるを知り言人耳に在り唇未乾ざるに忽二枚の舌を弄し李婉兒をして悲憤煩悶、頸に花環を懸けて膻血淋漓たる裏に仆れたる無邪氣の愛弟の亡骸を擁し慟天哭地心腸寸斷せしむるもの、假令笠頓（リットン）が弄筆舞文の致す所とはいゝ、當時の羅馬貴族の狀と憤然猛起渺たる一身を以て片影を世界史に落しゝ李婉兒が跡とを看來れば豈其實莫しと云ふを得んや、否寧百十にして已まざりけむ。史に曰く當日羅馬の平民は財を奪はるゝに忍び身の危きに忍び妻孃を辱めらるゝに忍はさるを得ざるに到り、平和と公道は手を携えて去り貴族の驕傲と政治の腐敗とは袂を連ねて來ると。於是平市街寺院に寓意の落書を張るあり、看て其奇異に驚き擾々たる者は他の市民也、其意を解し其旨を曉れる李婉兒に至りては滿腔の熱血直に火となり丈夫此急を救はずんば生きて男兒たらじと慨せしなるべし、宜其談論毎に必ず羅馬の特許、永代の主權を採て題目としき。往昔羅馬の議院がヴェスパシアン帝に捧げし法令は銅板に鐫りて尙聖汝羅氏蘭寺（セントジョンラテラン）の奏樂室に存せしかば李婉兒は此を飜譯解釋して稠衆の耳を傾けしめ特得の辯と熱慣の情とをもて古昔の議院人民の榮を說き立てしも優遊無識の貴族爭でか此重大の傾向に抗するを得むや啻空く冷罵を加へ得し而已、且李婉兒は他の一面には闇愚以て自ら韜晦し滑稽者流を學びてコロンナの宮裡に出入し、一面には渠が所謂善政の復古は爲し得可く又必ず來るべきものと平民間にもて囃され左袒の民愈多くして進ゝて輔助けんとする者さへ生じつれば今や煽動者たる渠假面を脫せざるを得ず。聖、襄兒寺門（セントニーゼオジ）に徵集の符貼られてアベンチヲ山に百の市人集まりし夜、秘密守る可く企圖助く可き誓盟畢りて徒黨に語りし李婉兒が言は、曰企圖は爲さゞる可からず又成る可し、不和無資力の貴族の强は眞の强に非ず人民が想像の强耳、力と權とは共に平民掌裡の物也、僧刹の收得は以て費に充つべし、吾徒が政府の敵自由の敵たる貴族に克ち得可きは法王も宣へりと。是李が事業の第一着歩にして實に千三百四十七年五月十八日なりき。

聖安日璃に聖靈讚會の一夜を過ごし明る廿日の朝風に吹飜す三旒の徽旗の下、右手に法王の代

理オルヴィトの僧正伴ひ前後を百人の徒黨に圍繞せ甲冑嚴く着たる巨魁李婉兒は大廳(カピトル)に進來り何の苦もなく共和の城壁を占め觀樓に昇りて渠が行爲と法令の認諾を人民より得たりき。嗟知らずや李婉兒、爾が此理解すると僅少に希望のみ際なき民衆に擁されて歡呼諂色の裡に共和政治の巨魁と經上りし觀樓は異日民心離畔して羅馬の大旗も懸河の雄辯も防ぐに由なき矢石の霰身に降懸る憂目見る仝じ觀樓なるぞかし。斯奇異の革命を袖手傍觀して唯呆然たりし幾多の貴族は愚か狂かはた已むを得ざりし歟、變を聞て蒼皇馳歸り『咄此狂奴を窓上より拋下せん』と痛罵したるステフェンの不在は李婉兒がねらひ中てし好機なりけむ、意氣壯なりと雖痛罵は回瀾を返すの力なし、大廳の警鐘耳根に徹して危機一髮の間に迫ればステフェン遁れ、貴族等も一令の下に追はれて羅馬は自由の鄉となりぬ。一滴の血を流さず一臂の抵抗無く夢の如き革命成りて神聖羅馬の主權見事掌中に握りし李婉兒今や此僭立を正式に飾らざるを得ず、帝歟王歟コンソルかセヂートルか皆非也、唯古く温しく而も平民保護の職たりしTribuneを撰みしこそゆかしけれ、唯此職に立法司法の權與へし例なきを知らざりし平民こそ無殘なれ。然れ共李婉兒は權を竊み名を成し膏血を洩らんと欲して起ちし僭主にはあらで貴族の血腥き手を平民の頭上より拂ひ幾百年前に凋落荒廢せし花苑に再春雨を注ぎ理想に殘る花環を現實の古都に懸けてんとの野心を懷きて起りし身なれば惡魔に欺かれてはイヴも罪を作る程に後は後、今執政の第一着手に爲しゝ所は何れか保民の意ならざる。貴族の跋扈と共に空文死法たりし、殺す者は死し害する者は償ひ、主權者ならで國家の門梁隍城を處分し私に兵を羅馬地方に屯し猥りに兵を執て館邸を堅むる等を禁じ、國道の保安は貴族責に任ず可く、慝罪舍盜は千マルクの罰銀を課す可しなどの法規平民の劍の貴族の膽をさす今に到りて悉其効力を生じ、大廳の一警鐘は立所に二萬の義勇兵を得可く、保民官(トリビュン)の身と其法令を護る爲には千三百の步兵と三百六十の鐵騎あり。若夫國事に斃レし兵士の遺子に百フロリンの恩給を與へ、國防倉庫救恤の費に寺院の收得を轉用して瀆神の罪を顧ざるが如きは其民を救ふに急なる衷情を察するに餘ありと謂つ可し。於是貴族を召還し新政府の法令に從はむことを誓はしむるにさしも飛鳥を落せしコロンナ、ウルシニ、以下の豪族、嚮には自己が館裡に侍して談笑を助けし賤民の前に今は我身の跪行稽手する運命の隆替を奈何に感じけむ、之を手初にて盟誓は社會の總階級に及ぼされしが僧侶紳士判官書吏商賈工匠位置愈低くして眞摯熱冲の情增高く皆曰く願はくば共和及び寺院と生死を共にせむと。要之李婉兒が黠詐嶮獪の寡頭政治を仆して聖彼得の位領を救ひ得しは大膽に非ずして何ぞ宜也法王が狂喜の餘李が言を信じ業を讃し位を認め漫に自天遣の使人なりと思惟するに到らしめしや。尙一步を進めて如何に權勢と門閥を輕しめ法令と正義を重んぜしか實例を示さんか、カプラニアにて油壺負ひし騾の奪はるゝや損害辨償の外に公道を保安せざる罪をもて四百フロリンの罰金を課せられしはウルシニ卿也、負債の爲に白晝街頭に捕拿されしは堂々たる羅馬の議員なりき、難破船を掠奪したるマルチン、ウルシニの如きは其門閥たると姻族たると紫衣の僧の哀願と疾病の篤きとに論勿く蓐裡ゟ牽出され一吟味の後市民稠衆の面前にて剝衣面縛死刑の宣告を受けしめらるゝに到りては誰か畏れ謹まざらむ。凶暴無懶怠慢の行爲は跡を絕ち、綠林は既に賊巢たらず牛馬鞭撻に先ちて動き靈域に香華絕えず驛舍に車馬絡繹た

り物貨市場に溢れて財囊を大道に解きて復怪まず、實にや羅馬は尙基督敎國の中央都府たるを失はざるの觀ありて此政府の惠蒙りし旅客は到る處保民官を謳歌し李婉兒の名一時歐洲に喧傳せり抑亦盛ならずや。而して李は尙百尺竿頭に一歩を進めて意答利を打て一大共和國となし羅馬府を其盟主たらしめんと夢想的統一策を按出し快筆を呵して飛檄を草し白節使に附して諸州に致さしめしに、諂か眞か、過ぐる所跪て統一を天に祈らざるの民なしと報白し來る李婉兒が得意知る可き也、況や此時漢牙利王レウィス對寧府女王ジェーンの縊殺事件を李が法庭に持出しゝをや。

『嚴正仁慈のニコラス、羅馬の救主、意答利の保正、人間自由の朋、平和公義の友、尊き保民官』とたゝへられ、天成の麗質宋玉を欺き天授の雄辯ソクラテスを嘲り、而も嚴たる容貌半點の犯すべきなく繡箔燦たる裘條の衣を披き黃金の十字架つけし磨鋼の笏採りて、星辰太陽を繞り靈鴿柑欖に宿する共和の旗押立てし下に躍る滿身雪白の蒲樟に跨る者は我李婉兒なり、半百戟を荷ふ勇士、一群鐵蹄を鳴らす驍騎後に擁し前に馳せ、鼙鼓の銀色日に映じて流星飛ぶかと疑はれ大小の旌旗風に翻りて霞に似たり、一簇の紫雲は高僧の衣、一道の紅霓は美人の袖、文官武職幾千百、是李婉兒が鐘鼓也何ぞ夫華奢なる、現はに讚し窃かに嘲る者豈唯に諸州の使節のみならむや。羅氏蘭寺裏聖靈の式を受け紫袍佩劒衆に向ひ『吾曹は法王クレメントを法庭に召して羅馬に駐らんとを命じ又君牧師會を徵集し、日耳曼七國主（エレクトル）を呼喚して移すべからざる羅馬人民權を簒ひ古來正傳の帝國統治權を犯しゝ所以を糺さむ』と叫び、新劍を世界の三方に振りて法外にも『是亦我有なり』と喝道三回、法王代理も諫め得ざりきもの李婉兒が擧動也胡爲ぞ傍若無人なる、前問後應に無數の卓子を案し男女上下綺羅星の如く酒は泉に似てコンスタンチンの黃銅馬より迸り唯水の少きを嗟むある耳、實にや千歲の上クーザーが現世を眼前見る盛宴を張り、浮世無明の醉醒めざる中の花の香や燭を秉て夜遊びし李婉兒が明れば羅馬の七冠戴きて人間豪華の極を窮め千歲一遇の盛は人目を眩惑瞞着し得てあはれ盛世と思ひけむ平民の迷夢も暫にして破れそめ、東天に昇る將星の光瑩々たるに呆れし輩我に歸りて今は其進行のたゞならぬと其の光の變り行くに眼を注ぎ、辯は正義より冒險は決心より多き本相を見すかすに至りき。要知舞榭歌台は古來紅顏を葬むるの地、Elfine Tresium の夢豈長ならむや。

書法傳承に就て

春日　圓城

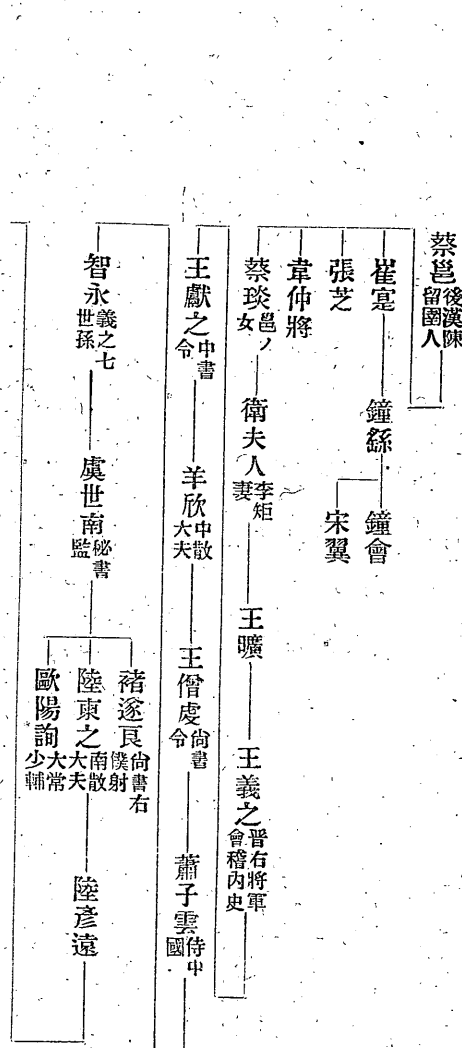
凡事あれば茲に法生じ物あればこゝに則起り標準となり規矩となるものなり彼の詩には詩の法ありて韻字平仄など六ケ敷ことありたゞ徒に五言若くは七言にならべたりとて詩とはいひがたかるべし我邦の歌とても亦まかなり三十一文字をつゞりたりとてなどか歌といふべき、てにをは、かかりむすび、詞のしらべなどみなその法にかなはずしてはならぬことなり書に於けるもこれらと同じく種々の法あり則ありてこの法にかなはざるものは其形いかに美なるも自ら活潑の勢なく龍を畫きて睛を點せざるが如し又この則にしたがはざればその字みだらにして韻を踏まず平仄のあはさる詩の如く文法にそむける歌の如しこれ古よりやかましくいといかめしく此書法を傳へ來れる所以なるべし

おのれいんじ年京都に遊ひける折り洛東岡崎町公安院住職横井藻譽師を訪ひしに談、偶〻書法の事に及ひぬ師は蔡邕書統六十二世之孫にして北泉と號し或は青龍庵雲友と稱し又靈超惠徹道人と呼ひ斯道の古傳古法皆之を傳へ頗る能書の聞えあり然に師は其齡古稀に近けれど其の傳ふへき人なく將にこの法の堙滅せんとするを憂ひ又近來斯道の振はさるをかなしみ大に斯道を興復して後昆に傳へんとて其人を養はんとつとめらる故におのれまた師につきて少しく傳承の迹をきゝぬれは其沿革の有樣をまらべ其源流をたづねんと欲せしも閑を得ず已みけるが今本誌の發行に際しにはかに手帳を操り出していさゝか沿革の一端をものせんとはしたれど參考の書もなくいと〳〵杜撰の至りなれど思ひ出せるまゝものせんとす他日また再考の期もあらん

それ支那の文字は書史會要に依れば蒼頡といふもの黃帝の史となり伏羲の文を弘め六書の義に依りて文字を作れりといふそは「ヘブリユー」「アラビア」などの文字とは異にして所謂象形の文字にて字々各〻躰形をそなへて麒麟鸞鳳の形、垂露懸針の躰、瑞草芝英の相、其他日月圜曲、龜文鳥跡の狀などになぞらへて起れるものなれば太古には筆法などなかりきその後史籀は古篆を作りけるが秦に至りて李斯といふ者小篆を作りて古篆を廢せり此時に王次仲は八分を作れり又程邈といふ者雲陽の獄にて隸書を作れりその後に至り前漢の章帝は草書を作る章草と稱するもの是なり後漢の蔡邕は王次仲の傳を以て八分を補ひ成し又眞書をも作れりといふ行書は魏の劉德昇之を作ると傳ふれども魏の鐘繇が行書押を能くすとあれば以前より自然に起りたるものならん是れ眞書の少しくなだらかなるものなれば誰が始めたりといふほどのこともなからんか飛白といへるは

蔡邕の創意にして隸書とは雲泥の異なり唐以後は八分を隸といひしもそはあやまりにて決して混ずべきものにあらず後漢の代に隸行はる今の眞書これなり晉の代に衛恒といふ者王次仲の八分を變して散隸を作る、かくて星移り世を經てくさ〳〵の書躰起りたれど其もとは後漢の蔡邕書を嵩山の石扉に學ふこと三年或る夜恍惚としてあやしき仙人來り五筆の法を敎へたりけれは邕は感得の後大に之を喜び食を忘るゝこと三日なりこれより書法起り漢和にわたりて綿々今日尙絕えず、今北泉師傳ふる所の正系と二三の書に散見する書系とを參酌して左に書流の系統を圖せん

書流系統



- 崔邈
  - 褚長父
  - 徐浩
    - 徐璹
      - 韓方明
    - 顏眞卿
      - 皇甫閱
        - 柳宗元
      - 陽形
  - 柳公權
    - 劉禹錫
      - 楊歸厚
      - 橘逸勢（但馬守延曆二十三年五月與空海入唐）
    - 懷素
- 空海（弘法大師五筆和尚謂悉曇於惠果受書於韓方明議三國之筆法傳之本朝爲心畫相承之大祖）
- 嵯峨天皇
  - 篁（參議）
    - 夏井（正四位下播磨守）
      - 敏行（從四位下）
  - 常嗣（遣唐使）
- 淳和天皇
- 志摩津左衛門尉
  - 菅公
- 美材（五位藏人頭）
  - 伊衡（參議正四位下）
    - 道風（正四位下木工頭）
- 兼明（親王中務卿前中書王）
- 村上天皇
- 奉時（道風子從四位下加賀守兵庫頭）
  - 佐理（參議正三位）
    - 行成（權大納言從二位世尊寺）
    - 道長（近衛家法成寺）
    - 公任（四條家權大納言正二位）
      - 定頼（中納言正二位）
    - 具平親王（二品中務卿後中書王）
    - 昭平親王（岩倉入道著愚）
- 時文（守）

和漢相承之書流以五筆和尚爲祖近代小野道風最得其骨余頃日養病於北山之次摘歷代之書系圖備後鑑將永其傳也

長久二年九月　權中納言定頼

- 兼行（正四位下大和守）
  - 俊房（堀川左大臣）
    - 覺融（寺長吏天台座主號鳥羽僧正）
      - 敎長（參議正二位）
      - 朝隆（中納言正二位）
  - 兼任（書博士）
- 冬時
- 成頼（參議從三位出家以後住高野法名覺空房知成號高野宰相入道）
  - 朝方（權大納言正三位）
    - 尹成（中務少輔）
      - 朝基（從四位下勘解由次官）
      - 敎家（權大納言正二位）
    - 良經（傳京極）
- 忠通
- 範忠（內藏頭）
  - 基範（正五位下美作守）
    - 弘乘（已講灌頂阿闍梨）
      - 宣方（治部卿從三位）
      - 慈觀（律師）
- 惟繼（權大納言正二位）
  - 賢悟（寶金剛院）
    - 定尊（寺長吏權僧正）
      - 長忠（權中納言正二位）
- 尋源（佛頂院大僧都）
  - 雄尊（法輪院大僧都）
    - 特純（山名孫八郎）
      - 孝成（曾我刑部大輔寓居于朝倉家、正周齊）
- 行經（從三位）
  - 伊房（中納言正二位）
    - 定實（左少將從四位）
      - 定信（宮內大輔從四位）
- 伊行（宮內權大夫）
  - 伊基（皇后宮亮正四位下）
    - 行能（從二位）
      - 經朝（右京大夫從三位號白川）
      - 定成（從四位上左馬頭）
- 祐助
  - 道圓
    - 義圓（天台座主還俗號義教爲征夷大將軍復學書于行豐）
- 經尹（權少納言從二位）
  - 行房（少納言）
    - 尊圓（天台座主青蓮院）
      - 尊道（天台座主青蓮院）
  - 行尹（從三位）
    - 行忠（參議從三位）
      - 行俊（從三位）
        - 行豐（世尊寺家書法ヲ持明院正三位基時ヘ傳フ）

額色紙形義敎公家僕細川右馬頭持賢其子孫七郎政賢諏訪志摩守元信其子兵庫頭貞秋以上四人相傳受也予於越前受貞秋之傳

- 秋共（清四郎共賢子飯河治部少輔一雨齋妙佐）
  - 定成（正五位上加茂縣主駿河守）
    - 秀賢（式部少輔贈正三位）
    - 敦直（從五位上加茂縣主甲斐守大納言正二位飛鳥井）
      - 道芳（本庄宮內大輔從四位下）
      - 宗種（權中納言難波）

右系圖本紙序ハ秀賢、禁邑ヨリ公任卿マテハ一筆也定賴卿御筆歟

定賴卿ヨリ尋源マテ多筆相交レリ雄尊ヨリ秀賢成定マテ行經卿ヨリ貞秋ノ小書ニ至ルマテハ即妙佐老人ノ御自筆也可秘可尊也

此一卷書、唯授一人之系圖也宮內少輔道芳依大樹之仰下向關東之間云遠境云繁榮地旁以恐不虞之災難與道芳相議令寫留秘本畢

于時慶安二年三月廿二日　敦直

- 寂源（山淨蓮靈院僧正高良座主敦季公猶子）
  - 道輔（小田原侍從智正家臣松井半平祝髮號拙齋）
    - 生直（敦直嫡孫正五位下加茂縣主甲斐守元道直受七ケ大事于定誠）
      - 家熙（近衛准三后豫樂院）
      - 司直（正五位下加茂縣主書博士甲斐守元仲直）
    - 元矩（從五位下備前守正則三男受七ケ大事于定誠）
  - 定誠（花山院內大臣正二位出家法名自寬）
- 廣賢（烏丸大納言光廣子六角木工權頭）
- 邦氏（正四位下加茂縣主甲斐守）
  - 氏梁（邦氏甥正五位下加茂縣主備前守）
    - 保考（加茂縣主書博士甲斐守岡本治部大輔）
      - 庸綱（政所大書吏佐々木宗六號玩易齋）
- 常雅（花山院前右大臣）
  - 長熙（常雅子）
    - 家孝（大炊御門）
      - 重威（書博士甲斐守入道靜休齋）
- 包綱（二代目佐々木宗六尾陽書官三好六左衛門）
- 永考
- 北泉（橫井藥譽靈超惠徹道人號青龍庵雲友）
  - 可親（上田清吉號樹德）
  - 義于（丹羽十郎號消雲）
  - 旭吉（中村久吉號桐香）

かくて禁邑はまた側勒努趯策掠啄磔の永字八法を創む爾來崔寔鍾繇張芝王羲之虞世南歐陽詢張旭顏眞卿等の名蹟相踵て起り傳承寫瓶益此道を研鑽し龍騰り虎嘯き雲興り風靡くの風あり殊に義之の筆蹟勁豪にして木に入り又石に入るの觀あり故に此書流を入木道と稱す（嗣出）

小澤蘆庵の墓比地

大林德太郎

抑も世に有難き書のくすしき所よりあらはれたるためし古よりいと少からずとかや一とせ七月の末つ方余嵯峨野に物して車拆神社の神宮高田靜衛大人の許にやどりその月一月を過ぐし侍りにきその折大人の秘藏せらるゝ書どもあまた余に示されたり或は遠つ代の儀式などつばらに記せるあり或はやむごとなき人々の世にありし樣をまのあたりみるが如くしるせるもあり或は歌文のつくりやうなどをじちにあげつらひたるもあり小倉の山の花紅葉何れ劣りはあらざめれど取りわき余のたふとくおぼえ侍りしは小澤蘆庵の墓比地とふ書にぞありけるそもかゝる書をいかにして大人の得玉ひつるやと問ひ侍りければ大人いひけらく此書につきてはいとゝもおもしろき一くさのは

なしありいでやかたりきかせん余が親しく交らふ友に堀某といへる人あり某維新の頃太秦（下嵯峨を去る五町）にて手習ふわざを人の子どもに教へける折教へ子の一人反古あまたもち來れる中にまことのすぢをこまやかにかきえたるありけり某つらつら之を見るに幾ひらかつゝきて其終に庚戌秋九月於太秦書之蘆庵とありければ某はたと手を拍ちこはめづらしき者こそ見出したれとて教子に白紙あまた得させてさきの反古どもをのこりなく得てけり後に人の手を能くみる人に示しけるにこはまがふかたなき蘆庵翁の手なりといひたりとかや某今なほ秘藏せり一日余借りえて寫しはべりたるものこそ此書なれといひきかせ玉ひけれは余大に其世にもたふとき書のむなしく埋木となりて朽ちはてざりしを悅ひ大人にこひて余も亦うつし侍りにき

狂雲佳月をおほふは世にまぬがれがたき理にや世にもめづらしき翁の筆跡も心なき人らが墨のためにけがされて見えわかぬ所少からざりしをもて大人もその所々は口惜しながらえうつさでおきつとの玉はれたり余がつたなき筆にてこちたく物せんよりはめでたき翁の玉の言の葉をそがまゝうつさまほしく思ひ侍れども烏羽玉の墨のためにさゝへられて詞のつゞきあひあしく侍れは心ならずも余が手づゝなる言の葉をまじへて物し侍りき見玉ふ人々ふかくなとがめたまひそ

うたは此くにのならはしにて神代よりはじまり今にいたりて上中下の人情これによりてあらはるこの歌もと法なしむかし式を立られたれと代々にこれを用ひられず是法なき中に法をたてたるか故也たとへは水中に水を分るか如くなれは也歌もと師なしむかし師なきよによき歌あまたあり師ありてむかしに及ばすたとへは苗の長せんとをねがひてぬきあぐるかごとくなれはなり我心を天地の外にもやりまた世にありとあらゆる萬事に通達してその今思ふところをいふ是歌なり此一言の外更にいふべきことなしそをなほくはしくのへんには次の如し四時のうつりゆくさま日月星辰の運行風雲雨露霜雪の氣色あるは世はなれたる山野河海の形勢を思ひやり人中には都鄙のさま富貴貧賤の樣男女老少の情あるは海士のめがり鹽やきあひき釣たれ樵夫の木とり草かるわざ農人の田うゑ木たくみ商人の所業あるは鳥獸虫魚の時をしり草木の花さき實なるまでもこれをしりあるは物名言語も都鄙一遍ならざることさへもあるべしたれもこれはあれども我心をかれになさぬが故にかれと我と隔絶して情に達せざるなり達せざれば歌はいかほどよむとも虛妄のだは言なり伊勢物語にいはずや歌はよまざりけれど世中を思ひしりたり云々とこれ歌よまむ人は世のことはりしるべき證なり但し上のくたりの如くいひつゝくれは生をかへても知るべからずと思ふべしされどそは然らず我心を此所にさへおけはいま日夜見聞するかたよりしらせて幾分づゝかはしらるゝなりそのたひたひ我心をかれになして思ふべしかれかくすことあたはずおのづからあらるゝなり此見聞覺知によりて我思ふ所かならずありそれを人の耳にもさる心なめりときかるゝやうにつゝくべし昔人の歌をよめるみなこゝよりよみ出たるなりされは我心にさきだつものなし人にならひてよまず作例によりてよまず是無法無師の證なりこのことわりはあざやかにしられたりあかはあれど我才ともしけれはその昔人のよみおけるあとをみてよまばやと思ふ是は第二儀なり二儀といへども上にいふ心をもてこれをみれは我おもへることゝ悉古人よみおけるに合して一なりそのみるべき書は日本紀萬葉百家の家集古今より八代集までをもみて代々につれてうつりかはる歌姿をも

見あきらむべしこれも悉くみつくすにも及ばずかの心をもて我力の及ぶほどみもてゆけは歌よまんずるやうはたしかにあらるさて我心をいひいづることなれはよきもあしきもみなうたなりよしとてほこるべきにあらずあしとてはづべきにあらずされどよきにはしかざるべしそのよしあしをいかゞしてわきまへんと思はゝまるべし萬葉の古代のうたなれど末の代の今まで心詞盡して聞ゆる是おのづからよき所なり同し萬葉にありとても末の代まで心詞盡せず人のもてあそばぬこれおのづからあしき故なり又詞のよしあしを分ていはむたとへは鶯をさへづる牛をほゆるといふはたが耳にもさはらずありのまゝなる詞なり鶯をほゆるといひ牛をさへづるといふ樣なるが詞のあしきなりこれもと鳴とをいへれは心たかはず心たがはねどいひざまことなればことのほかあしげに聞ゆるなりされは心にたがふことなくともいひざまのきゝよくなだらかならんやうとならひもてゆくべし

こゝに義あまたにわかる古人のよみたるあとをみるは彼第一儀の無法無師のさかひにいらんと思ふ故なれは今みる所はみな古人の糟粕なりいかにもしてこれをはなれて我心をよみいたして萬葉のかみにいでんと思ふ心ざし是最上の心なり此心をふとくたくましくしてよみいづべきなり世中には禮讓謙退をよきことゝす今我歌をよまんと思ふ所にては如此心をいだかば一句もよみいづべからず心も天地とひとつになしてよむべし天地一躰なるが故に第二儀におちても第一儀に合するは是なり

又儀分れて日本紀萬葉八代集までをみて末世の風はいやし歌は萬葉日本紀をいづべからずと思ひて後世の歌の姿詞一切不用萬葉日本紀をみとふたとの箱にして此中をいづることならずとする歌人あり是は末代の詞たるをいとひて古代のいまた調はざるをあらず理にくらければなりものにはじめ中末ありそのはじめはいまだものとゝのほらずとゝのほらぬ中よりもとゝのひたることあり中にては萬事よくとゝのふとゝのひみちたる中よりやゝおとろふべきさまもまれまれにまじれり末にてはおとろへたるものゝみおほくてとゝのひたるものゝのこれるはまれになりゆくなりこれこのみちのみにもあらず萬物みなかくのごとし上古の歌はいまだふ調も多くまじれりその代ならばいかゞはせんすでにとゝのひすぎておとろふる比いまだふ調をよしとせんや住居にていはゝ宮殿定れる後に穴にすみ火食する時にいたりて生物を食ふが如し又この箱の中にありて是を最第一究竟のことゝおもへりあらずや是皆古人の糟糠なることを

又義分れて萬葉より八代集をみるに上古のうたは詞こはこはしく耳にうとくすげなくてよからずたゝ新古今の比の躰こそいまめかしくやさばみておもしろけれど浮世になるゝ一僻ありさるこゝろより詞のやさばみたるをもとめすこしこはこはしからんをのぞきてやさしく奇ならんとのみ心かけゝる故歌といふものは詞のかず定まりたるやうになり或は家々にて不庶幾の詞加難の詞なとやうのことといでき甚しきにいたりては傳受口傳家説などいふことさへいできにけりこれを知りたるを堪能博覽とおもひこれしらざるを未練未達にて歌詞にあらず歌道をあらぬなどいひあへりみよ傳受口傳を得し人の歌の聞えぬことを思ふべし其比よりあだひにみちせばくなりて歌の最第一は心をさきとするなどいふことは夢にもあらずいひきかすれども通ぜざることうるまの人にもの

いふがごとしこれ氣象下劣のともがらことごとくこゝにおつ我つまはじきしていやしむ所なりかくならひゆかんとおもへど日本紀萬葉八代集までを見あきらめむことこれまたやすきにあらずいかにも容易に是をまらんと思はゝ前後の書をのぞきて古今集をよくみるべし是第三義なり三義といへどもはしめの心をもて第一境にいらんとおもひてみれは第一にかはることなし萬葉日本紀の歌はよきもあしきもたはふれたるもまめなるも一つかねにしてたとへは塵塚の塵のごとしされはその中には金玉もまじれり貫之獨歩の才をもて古今集をえらひあしきをすてよきをあつめて歌の軌範となせり古今をもていにしへをてらしてこれに似たるをよしとし似ざるをあしとし又後世今までをてらして似にざるをもてよしあしをまるべしその見識さだまりて後新古今比の躰をみは實うすく歌をこのめる躰になれるをまるべし猶歌のよしあしをわきまへんと思はゝ代々の歌合あまたあり其代々の堪能俊傑の宗匠歌の判をなせり是をみる又よき修業なりそれもはじめの我心おきてをたがへず道理を以て是をみ古歌にならへて善悪をまるべし俊傑宗匠たりとも誤なきことあたはずたとひ十に一二の誤ありとも八九のよきをたうとみてならふべしとかくあしきをすてよきをならはゞ心はわが心なり詞は我國のことばなり第一のさかひにいり古人の糟糠たらざる歌をもなどかよまざらんや

いにしへ歌のよみかたの書なし古今序其はじめなり代々の宗匠これにもとづきてあらはす書あげてかそふへからずしかれは今一言をくはふべからずといへどもまひてもとめに應じてこれをかく又かの水中に水を分るがごとしこの數言をみるよりも古今集一をあきらめんにはまかざるべし　庚戌秋九月　於太秦書之　蘆庵

雜報

春色來る

鹿子まだらなりし卯辰山もやう〳〵狐色を帶び、たゞ白妙なりし白山立山の峯々もさすがに霞の衣を引きはへて、春は復た越路の空に立ちかへりぬ。日朗かに雪消のグラウンドを照し、東風のどかにチットを吹きわたる日、待得たる幾多の健兒がボール、ロンテンニスに積れるうさを晴さんとするを見る。運動場裡に春色來れり。

春期休業來らんとす

第二學期將に終らんとす、春期休業又將に來らんとす。花咲ひ鳥謳ふ春陽一旬、諸君は如何に之を消す可きか、筆硯を載せて加能の山水に嘯ぐ人もあらん、閑聰に倚て錦心繡腸をしぼる人もあらん。斯間の消息、庶幾は本誌々上に聞く事を得ん。

委員撰定

本日學藝部並運動部委員は各部長の推選に依り、會長の承認を經て、左の如く定まれり。

學藝部、講談會委員、
島彌太郎　前川益以　水木常信
演說討論會委員
境長三郎　中大路正雄　春秋原在文

運動部、ベースボール會委員、
佐藤家太　野村淳治　岩田成實
北島常晴　久保田整
ロンテンニス會委員、
中屋重樹　阿部信行　柏原省私
浦田仙三　草野繁
フートボール會委員、
池田愛輔　信濃榮三郎　栗本貫一

是を以て我會各部各小會は、其委員の選定を終へたり、憶ふに委員諸氏の我會に忠實にして瘁盡に吝ならざる、各部の事業これより其緒に就き、更に大に其實を擧ぐるものあらむ、吾曹は固く之を信ずると共に、多々益々然らむ事を望む者なり、至囑々々。

在韓西村樂道の通信

雜報子への私信中左の朝鮮風俗の一斑をも報し來れり依てこゝに抄寫して諸君に頒つ

去二月九日は韓曆正月十五日にて三ヶ日に次く遊日なれは當居留地を一里半程隔つる韓村釜山鎮にては例年の通綱引の遊ありき同地には天然痘流行せる爲注意すへしとの事なりし故生は行かさりしが中々の賑にて後には大喧嘩となりし由なり。綱の全長は百五十間もあるべく藁にて製し兩端は六條に分ちありこれに二十歳位より以下のチョンガー（小兒）蟻の如くに繫がりてエイエイ曳く樣中々に面白く土人は非常に氣を入れ勝負によりて自村の其年中の豐凶を卜すといふ一大事なりと（東は釜山鎮西は坂下村なり）されは毎年大抵審判其他種々の事より喧嘩をでかさぬ事はなしと云ふ

當居留地にては毎月一人に付十錢宛の分頭稅を課せらる

生は審美學を知らされとも衣服に關する美の觀念に就ては地球上日本人が最發達し朝鮮人が最下等なるものならんか朝鮮人は色の配合より起る美の觀念に乏しく常服は何の趣もなき白色を用ひ兒童の正月服なども全紅全青の上衣にあらざれば袖の邊を五色に染め分けたるものゝみ誠に殺風景極まるものを美なりとて喜ひ居るが如し日本人は必ず色の配合を非常に注意し例令は羽織は黑で足袋は白とかシヤツは白色にあらざれは黑に遠き縞なりとか其他帶前掛半襟等それ〳〵の定色あり衣服の縞にてもこれはなりとかこれはじみなりとか要するに色の配合より生する美の觀念非常に豐かなるものゝ如し西洋人に至りては此觀念漸く薄くヅボンチョッキ上衣皆同色を用ふるが如き又差ひたりとて上衣を換ゆるか袴を換ゆるとかに止まり日本人の如き嚴しき吟味を爲さず頸飾手袋靴帽等別段の趣味あらさる也そも〳〵日本人が右の觀念に富むは如何なる原因によるものならんか思ふに日本に於てはチーチュアが既に萬國に秀でゝ色の配合に富むか爲なるべし春の美花夏の綠蔭秋の紅葉冬の白雪より森林草木湖川の狀に至る迄配色の美に富める事は已に萬國人が世界の公園なりといふを以ても知るに足らむされは其住民は自から此自然の美に慣れて右の慣念發達せるものならむ朝鮮に至ては全く自然の美を欠き地に秀靈なる山なく山に欝蒼たる樹木なく（間々松林の藪ふものあれとも殆んとなしと云ふて可なり）從て變色の植物に乏しく日本とは丸で霄壤の差なれは自から人心に影響し從て衣服に關係を及ぼせるは疑ふ可からざるが如し蓋し審美學者研究の一材料ならん

物價一斑

輸出品

精米極上一石八圓六拾錢
大豆極上一石四圓拾錢
牛皮大　一枚貳拾圓
虎皮上等一枚三拾圓
豹皮　拾壹圓
狸皮　五拾錢
純金十匁　四拾九圓
黃苔百斤　七圓

半夏　拾圓

輸入品

金巾一反　四圓

丁銅百斤　貳拾四圓七拾錢

白銅百斤　八拾圓

讃岐白糖百斤拾一圓

食鹽五斗　三拾錢

煉瓦中等千枚拾二圓

石油　二圓拾五錢

對州木炭八貫四拾五錢

對州松板一寸七拾錢

當居留地の言語は九州特に壹對兩島のなまり最多きが如し

朝鮮の鞋は草履の如し勿論藁製にしてすてきに細長し日本製の如くに繩にて足にしばり付けることなし通常の韓人は路の遠近に關らず天の晴雨にも關せず老若皆これを穿つ

間々上等社會のものは支那風の靴を穿つものあり革製なり

雨天の時用ゆる足駄は木製にして小舟に臺を付けしが如し（雜報子云ふ同氏よりは圖面を添ゑられしかとも都合によりこゝに畧す）されとも下等一般の人は雨天なりとも皆鞋のまゝなり又當地は一躰雨量の少なき處なり

足袋は靴下の如き形にて大抵綿入なり右の鞋靴等は皆此綿入足袋の上にはく然れとも世界中足指を兩分して履物をはくは恐らくは日本人のみならん

武藝大會記事（承前）

午後　劍術

午鐘點し終つてよりこゝに一時間、來賓雲の如く坐に着き、劍士霞の如く亦場に集る、腕を扼して高く吼ゆる者、竹刀を揮つて微笑を漏らす者は胸裡何の成竹かある、招待されたる師範學校尋常中學の健兒は、各々チヤムピオンを擁して席を片隅に占め、日頃學問をつちのけとして修練したる此技を以て、天晴勝勢を其手に握らんと、得意の有樣は早や顏容にあり〳〵と顯れたるこそ笑止にも、亦勇ましけれ、さてはしたり顏に疎髯をひねるものは當警察に於ける、屈指の諸先生其人と知らすや

一本勝負終りこれに次きて三本勝負始まる、初めなるは記するに足るなく、終りなるは記するに筆なし、龍躍り虎狂ひ、風驚き石飛ぶ、雷電閃火的の形容詞は既にかびを生して人を悅はしむるに足らず、寧ろ僅かに批評を其間に加へて止まん歟、雖然雜報子は元來此道に盲ならざるもまた明を欠けり、而して倨傲なる雜報子は明と不明とに頓着なく、頻りに批評寧ろ好んで其短處を擢擧せるつもり也、蓋し批評の批評を受くることは覺悟の前、飛箭極めて多かれ、我れは衣川の辨慶となりて止まん而已

（○ハ勝印×ハ負印）

一本勝負

判定者　石川龍三

二等賞　吉川貞二郎

同　稲並幸吉

同　老田太文

同　富田薫

同　白井精一

三本勝負

判定者　廣瀨頼一

勝　○宮北友吉

負　○齋藤恒

勝　○松下雅雄

負　○河野義雄

勝　○草野正義

負　○杉本重太郎

勝　○眞田信太郎

負　○佐々木政直

勝　○福岡才外

負　○中野幸

勝　○田村昌新（尋）

負　○野崎安近

勝　○松崎友吉（師）

負　○清水金吾

（負）（尋）吉村盛男
（勝）○×野村亨

判定者　野村政行
同　吉見彌五郎

（勝）×○富岡春雄
（負）×○野村淳治

（勝）×○河越富松
（負）○×岡永堯

（勝）○×北川友三郎
（負）○×中村光吉

（勝）○×中村孝三郎
（負）○×岩倉兵二郎

（勝）○×竹内嘉十郎
（負）○×中屋重業

（勝）○×廣松甚太郎
（負）○×飯森玄三郎

（勝）×○小原外吉郎
（負）×○田中正一

（負）○×西野正信
（勝）○×稲垣文二郎

判定者　廣瀨頼一
同　石川龍三

（勝）○×松尾金吾
（負）○×信濃榮三郎

（負）○×横山隆太
（勝）○×堀尾揆一

（負）（尋）飯森忠三郎
（勝）○×草野繁

判定者　野村政行
同　廣瀨頼一

（勝）○×河越富松
（負）○×永岡堯

（勝）○×北川友三郎
（負）○×中村光吉

（勝）○×中村孝三郎
（負）○×岩倉兵二郎

（負）○×松本三太郎
（勝）○×三好久朋

判定者　都賀田秀穂
同　野村政行

（負）○×三橋篤
（勝）○×藤田良敬

（勝）○×笠井貞
（負）○×石田莊二康

（負）○×浅山英男
（勝）○×佐藤龜久次

（勝）○×押川原三吉
（負）○×前益次

判定者　廣瀨頼一
同　吉見彌五郎

（勝）○×千秋義章
（負）○×若林周三

番外

（負）○×田村昌新
（勝）○×野村淳治

諸劍客試合

判定者　藤岡親明

（廣瀨頼一）（泰秀穂）
（石川龍三）（野村政行）
（井原勝吉）（柿田信行）
（吉見彌五郎）（廣瀨頼一）

二十一番の取組の内、見事十三の勝數を得たり、彼の劍術を事とせる尋中師範校を凌き、彼の劍術を業とせる警察の髯連を壓し終んぬ、而して當日尋常中學校は九番中四の勝數を握り

師範學校は五番中一の勝數を握り

警察先生は七番中三の勝數を握る

偖、我校の劍術の先生方は勿論避けて、判定の位置をは市内の諸劍客に依頼したり

以下妄評（且らく多罪の字を附せず）

河野松下兩氏の取組に於て、竹刀の働きは我れ寧ろ河野氏を推す、又松下氏は常に小手をあくる癖ありしも河野氏の一度も、乘ぜざりしは遺恨なりき

草野氏と杉本氏は、殆んと互角なるべしと雖、其技に至りては學ふところ甚だ異なる、草野氏は輕きと風の如く、杉本氏は重きと岩の如し、草野氏は好んで虚刀を用ひ、杉本氏は確かに實刀を使ふ、一は打太刀一は受太刀、かれは敵を斬るを務めこれは己を守るに專ら也、たゞ其勝負は論するを要せず、注意すべきは草氏は重かれ杉氏は輕かれ

福岡中野兩氏の取組に於て、全局の勝利は福岡氏に歸せしも、我は寧ろ中野氏を推さんと欲す、劍術の巧拙の如きは僅かに勝負の迹のみを以つ

て、遽かに判定すべからざる也、こゝに福岡氏に物申す、君これより姿勢を正すことを務められよ、腰を折るは餘り見よきものに非ず、又中野氏は何を恐れてか常に受太刀となる、何そ進んで一喝を試みざる

尋中撰抜の少年田村昌新氏は場の中央に躍り出でたり、これと反對の側より野崎安近氏顯れぬ、昌新安近共に坊主臭き名、果然兩氏共いが栗頭の豪の者とは、後に面を脱きて始めて知りぬ、さても勝敗は學校の名に關するとて、腕をたゝきて怒鳴る聲絶間なく、兩氏勢益猛けりて竹刀の下るもの、さながら篠つく雨の如く、隙間あらせず切り交ひたる樣の雄々しさ、忽ち一聲堂を劈きて「小手」を叫ひしものは誰そ、安近先生意氣極めて豪也、尋中の面々は色めき立ちぬ、されとも流石は昌新氏、奇麗に胴を拂て、これより互角の勢となり、さはしは雌雄も決せざりしかとも遂に面を以て二本の勝を安近氏に讓れり、これを各校との勝負の初めとして、入り代り立ち代り互に勝敗ありけるが殊にすぐれて人目を牽きしは

飯森草野兩氏の試合なりけり、縱横無盡とはこれの事ならめ、手と云はず足と云はず、肩と腰とに論なく、當るを幸ひ打合ひ〳〵、今にも氣絶せざるにやと、疑ひしものは我れ而已に非ざる可し、先づ漸くにして勝負定まりぬ、二本と一本、草野氏は勇んで舊の坐に歸れり、猛なる哉勇なる哉且つ壯なる哉、又萬福なる哉、午前は柔道に午後は劍術に、各々二等賞を受けられたり

松本三好兩氏に於ては、其技少しく隔つるものあらむ、我れは何か故に三好氏が三本の勝を得ざりしかを怪しむ、氏が五度面を切込んで、淺きが故に意蹉跎せしは頗る殘念なりき

笠井氏と石田氏は共に以つて比するに足らざる也、姿勢と云ひ打太刀と云ひ、笠氏を小見とせは、石氏は既に大人也、唯石氏が爲めに惜むところは、笠氏の隙は常に小手にありしことを、知らざりしことこれ也

「長ちよろ」と呼はれ「燈籠竹」と冷かされしは師校のチヤムピオン淺山氏其人也、太刀風に果敢なく折れて引込みたることこそ是非なけれ、大和尙佐藤氏は面面胴を以て見ん事大勝を得たり、

押原前川兩氏の取組は實に意外のものなりき、前川氏を以て押原氏に取組ましめしは、畢竟之を定めし者の過り也、前川氏敗れたりと雖も毫も愧づる所なき也

これより直ちに進んで警察の髯連との勝負に遷らん、

中屋氏はいつも乍ら華手なり、太刀使の際だつとは今更云ふ迄もなし、されとも竹内氏また並大低の敵にあらず、さかも時々は試合の最中不穩の態を顯はせしも、先づは非常の破裂なくして止みたり、勝敗の迹は請ふこれを番組に就て見られよ

次に名乘り出でし廣松巡査は、掛聲の制に案外に脆かりけり、飯森氏の爲めにいとも見事に、御胴を二本迄入れられたり

面面面の勝負は我れ是を小原田中兩氏に於て見たり、負けたりとて更に痛むと勿れ、第一番の面は確かに田中氏によりて叫はれたれは也

西野稻垣兩氏の試合は如何にも見事なるものなりき、西野氏の如何は我れ知らされとも、稻垣氏に至ては我校第一の熱心家にして、寒稽古に一日も欠くる事なく、四百幾本を使へりとか聞く、其修練はこゝに顯れ、顏から髯か、髯から顏が出でしやと疑ふ計りの西野氏を、胴、胴、を以て切り伏せしは御手際確かに見受けられたり

あゝ我校隨一の劍士信濃榮三郎氏は、去歲より學務多忙の故を以て、ながく擊劍を廢せられたれば、今回の失敗亦止むを得さる也、然れとも豎子をして名をなさしめしにはあらで、人一層の大男而も此道にかけては、當警察に評判高き松尾氏の事故、さして愧づるに及ばざる也

兎角勝負といへは事々につきて小言を述べ、旨く面をやられても、淺いとか横とか言ふは逃るべからざる者也、況んや勝負を校外人と爭ふに於ては必ず執着の其の間に生ずるものなからんや、我れは獨り堀尾氏に於て感するところあり、二十餘番中我れは君を推して最も稱歎せんと欲す、其太刀筋の正しく其姿勢の正しき亦言ふに及ばす、此一番の取組こそ、いとも嚴肅にして毫も禮儀を亂さゞりき、而も面と胴とを以て敵手を斃せるはあゝこれ何等の美觀なりしぞ

諸劍客の試合に至ては唯感歎の他なきなり、焉んそ評言を呈すべけんや

我れはこゝにて當日の記事を終らんとす、依りて一言述べんと欲するものあり、今日の試合我校得るところ勝はもとより勝なりと雖も、如何せん音通小たるあり、二十一番中十三の勝數未た俄かに以て歡呼すべきに非る也、聞説らく警察師範尋中の輩は、月下胸を打つて遺恨十年をつぶやくとかや、他日大擧して而して來るは、素より其所たるべし、劍を擊つの要は專ら勝敗を爭ふにあらざるも、蓋し勝旗を敵手に握らしむるは、男子の亦愧づる所となす、而も勝て兜の緒を締めよと云ふこともあれは、諸君益々奮はざる可からず、敢白

寄贈雜誌

久徵館同窓會雜誌第七十八、九號
龍南會雜誌第三十四號
尚志會雜誌第九號
校友會雜誌號外（野球部史附規則）
全　第四十四號

右例によりて寄贈を忝ふす、總て書庫に備付あり殊に野球部史は部員諸氏の一讀に値す。

投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず

一雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論説諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゞるべし

明治二十八年四月九日印刷
明治二十八年四月十日發行

編輯兼發行者　中川忠順　金澤市五十人町十一番地
印刷者　中村孝　金澤市廣坂通第四高等學校時習寮
發行所　第四高等學校北辰會
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地